

昭和三十三年一月

同窓會

會

報

熊本大学医学部同窓會

第 二 号

目次

表紙題字		谷口弥三郎	1
挨拶		谷口正道	2
診療報酬問題について		熊太	5
句		南	6
大学に關しての教育制度に就て		須田	8
外来診療所落成式		田代	9
其の後の大阪支部		牟田	9
山崎先生を訪ねる		世良	9
随想		町野	11
同期同門生の思い出		齊藤	12
同窓親睦		岡島	13
卒業滿二十五年を迎えて		貴田	14
会報に寄する期待		六反田	14
母校にぞひ学校保健字講座開設を		小田	16
紀行九州山脈の秘境を尋ねる		津留	17
町医春秋		大森	21
器の中の命をみつめて三十年		小玉	22
再び同窓会会館建設に就て		尾崎	25
酒と私		勝屋	26
随想		大塚	27
雑感		福田	28
自叙紹介		大友	29
同窓ひろい		岡村	30
教室だより		岡村	32



挨拶

同窓會々長 尾崎正道

會員各位の御援助と編集委員方々の御奮勵によつて、見事に出来上りました同窓會々報第二號を御手許に御届けすることの出来ましたことを、心から欣しく存じまして、皆様に厚く御禮を申し上げます。

第二號は、愈々會員相互の連絡機關としての本來の性格が打出され、學内の動き、教室便り、或は隨筆等、實にけんらんたる内容となり、まことに待たれる會報となりました。

會報第一號發刊以後、學部内で起りました重なる出来事を御紹介いたしますと、電子顯微鏡同好會發足（二・六）鰐淵學長再選（四・二五）醫學部學友會發會式（四・三〇）新任河盛教授着熊（五・七）基礎醫學教室建築起工式（八・二四）形成外科懇談會發足（九・七）河北教授學歸（一〇・三）病院外來落成式（一一・六）瀬邊教授渡台（一一・一六）等でございます。いずれも醫學部の前途に光を加えることのみでございまして誠に御同慶にたえません。この勢に乗じ、是非共我等の同窓會館建築の運動を押し進めねばならないと存じます。このことについては既に學部の内外に緊密な連絡もあり、今やスイッチを入れるだけのことでございます。同窓會の焦眉の問題として取りあげたく、其節は、皆様方の十二分なる御協力を御願ひ致したいと存じます。

會報第二號發刊にあたり御挨拶を兼ねて御願ひを申し上げます。

（熊大、醫學部長）

診療報酬問題について

谷 口 弥 三 郎

現行の單價は、過ぐる昭和二十六年十二月私が日本醫師會長の職にあつた時、日本醫師會の決議によつて單價問題は重大な政治問題と化し、迂余曲折の結果、速かなる適正單價の決定をみるまでの暫定措置として不滿ながらも受諾したものである。當時の經濟事情からして止むを得ざるものであつたとしても政府は直ちに入院料の点数を引き上げ、社會保險診療收入に對する標準稅率を三〇%、實情により二五%まで引き下げ得るといふ稅措置を講じ、また醫師會との公約を果たすための臨時醫療保險審議會を設置したと等は、いづれも暫定單價の低きに失したことを認めた結果に外ならない措置であつた。

爾來、今日に至るまで、暫定單價は据え置かれ、賃金ベースの上昇にもかゝらず、社會保險醫療における診療報酬は、醫療擔當者の稼働時間の延長によつて極限的に維持されてきたのである。尤も此の間、租稅特別措置法の改正によつて、二八%の稅措置が法定化されたと雖も、速かなる單價の引き上げ問題は、今日もなお醫療擔當者の宿命的悲願となつている。健康保險法の改正を機として、去る第

二十六國會においては、時の厚生大臣は、現行單價の適正ならざる事實を素直に認め政府は單價の引き上げのために努力することを公約した。公約した單價改訂を明年度より實施するため、今秋まで政府試案の作成を國會に約束した厚生省は、去る九月十一日、社會保險醫療の診療報酬の算定方法並びに点数及び單價策定の方針を明かにした。この厚生省事務局試案なるものは、直ちに中央社會保險醫療協議會に對する諮問手續がとられた。

その骨子とするところは、一般診療所における昭和二十七年三月の醫業經濟調査をもととし、昭和三十三年の年間平均に至るまで、諸經費等の變動を加味して診療報酬を算定すると、一診療所當りの平均收入は月一五九、六三二円となり、現在の月一四七、一二五円に比し八、五%の増になる。このため診療報酬を現行のものに比し八、五%程度引き上げることとした。そして診療報酬の一点單價は十円としたのである。これによれば、

一、三十二年度社會保險醫療費見込額は、二千七十七億円（これの八、五%増は一七七億円）であるが、三十三年

度では国保被保険者六百八十万人増をはじめ、健保、日雇健保、船員保険など各保険の自然増加をふくめ二千四百億余となるので、その八、五%を見込めば二百十七億円増加する。

一、診療報酬算定表は、従来の單一制を改めて甲表、乙表の二表を作り、保険医療機関に何れかを選択させる。但し一年間は變更することが出来ないものとする。

一、甲地及び乙地の地域差は、従来より少くし概ね五%とする。また、甲地及び乙地の單價の差別を廢し、従来の甲地であつた地域に所在する保険医療機関に對しては、療養擔當地域手當として、外來患者については一ヶ月の診療件數一件につき三点、入院患者については入院日數一日につき三点加算する。

甲表は、基本診療料、特掲診療料に大別し基本診療料においては、件數拂的な思想を加味し、初診の際、若しくは再診の際、又は入院した際に行われる診療、投薬（藥劑の費用は除く）簡單な検査、注射、處置、及び理學的療法、入院等の費用を一括して初診時基本診療料、再診時基本診療料及び入院時基本診療料として支拂う。特掲診療料においては、特殊な診療に要する費用（往診料、慢性疾患指導料等）特殊な検査、注射、處置及び理學的療法に要する費用、手術に要する費用等を設け、基本診療料に加算して、支拂う特殊な料金とする。

乙表は、診療報酬總額の引上げ分をもつて診療報酬が低額であつた診察料、入院料、検査料のほぼ一割程度の引上げを行い、その他の診療報酬の額は概ね現行診療報酬の額に止めるものとする。

以上の如くであるが、この算定表は昭和二十七年三月の醫業經濟調査をもととし、之に中央社會保險醫療協議會の専門部會の中間報告を尊重して作成したと説明しているが、二十七年の經濟調査は信憑性に乏しく、専門部會の報告は診療行為毎の結論が出ていないので、その基礎が薄弱であり、また甲表及び乙表について精細に検討すると多くの矛盾を包藏するといわれている。

日本醫師會も又、殆んど時期を同じくして一ツ橋大學山田勇教授の指導による醫療報酬算定の方程式に基づいて單價算定案を作成しこれを公表した。

日醫の主張によると、現在保險診療にたづさわつている醫師の七〇%は採算を割つてゐる。そのことは、醫師が減價償却費、積立金、研究費を喰いつぶし、或は醫業以外の他の仕事をやることによつて、漸くその診療をつづけていくという現状であるから、このような状態が今後も續くとすれば、一般の醫師は醫業から驅逐されてしまうであらう。

今、單價一円を引き上げた場合における公共團體と保險者の實負擔増をみると、国の負擔増は六億八百万円である。

が、縣では逆に二億七千七百万円、市町村でも一億五千二百百万円のそれぞれの収入増となり、保険者の場合も多いところで僅かに十億円程度の實負擔増に過ぎない。他方、被保険者一世帯一カ月の實負擔増についてみても、政府管掌で十円九十九銭、日雇五円八十一銭、国保二十一円三十七銭、共済組合でさえ僅か二十四円二十三銭である。以上の通りであるから、單價十八円四十六銭を決定したとしても国庫負擔の増額は約三百億圓にすぎない。

日醫がこの十八円四十六銭の單價を打ち出したのに對し、早速、十二日には健康保險組合連合會と国民健康保險組合中央會が協同聲明を出してこれに答えた。

それによると、若し醫師會の言う如く、單價を十八円四十六銭に引上げると、国民の醫療費負擔は千四百億圓の増額となるので、これでは眞面目に醫師會を相手として醫療費問題を討議することは困難であると主張している。

殊に、健保連合會側は、国民所得は昭和二十六年以來五割の増收であるが、醫師は二倍の増收になつていゝと説くが、これは自由診療が保險診療に代つたのが大なる原因で、その他稼働点数の増加、高價藥品の使用などによるものであつて、醫療機關は却つて赤字が増加しているという現状である。

いま、国立病院の實情を見ても、本年度の如きは一点當り經費單價と現行單價との間には一円八十六銭の赤字が出

ている。また、日醫の昭和三十年十月及び三十一年十月に行つた營業實体調査によると、現行の單價では僅に二十八%の診療所が經營の採算に乗るだけで、残りの七十二%は採算がとれない狀況であると訴えている。

合理性のある診療点数を改正することは、国民皆保險の實施の基礎的條件であるが、中央社會保險醫療協議會の専門部會においても、なお結論を見出すまでに至らず、また日本醫學會よりも學會の意見を徵せず、今回の如き大巾の改訂を企てたことは、醫育機關を始めとし、全醫療機關に及ぼす影響は眞に甚大であり、極めて不合理であると厚生大臣に申し込んでおる狀況である。

現行の診療点数については、物と技術を分離して考察すると共に、技術に對する充分なる評價を定め、各科、各診療行為にアンバランスの生じないように研究すべき特別の審議機關を急速に設け、學會の意見も充分に反映せしめ、慎重に検討を盡した答申を得た上で適正なる改訂を行うべきものである。しかし乍ら、これは短時日に容易になし得る作業でないことは、昭和二十七年以來設置された臨時診療報酬審議會、中央社會保險醫療協議會等における審議實績に徴しても明らかである。去る第二十六國會で政府が公約した、昭和三十三年度より醫療擔當者の待遇を改善するという問題は、同年度の予算編成期にあるこの十二月までにその構想を決定し、醫療費の増額分について予算案を組

まなければ、次期通常国会において成立することが困難になるのである。かゝる急迫の場合において、診療点数の根本的改訂に着手することは頗る困難であるから、政府の公約を實現する意味においても、簡明素直に單價だけの引き上げ改訂を實施すべきものである。

それにも拘らず、多くの派生問題が起つて中央社會保險協議會における單價改訂問題の審議は進行しない現状にある。かくては、前國會で公約された醫療擔當者に對する待遇改善問題も棚上げの形となり、單價引上げも見送りの結果となるであらう。これは社會保險醫療にとつて不幸なことである。

此の際、国民皆保險を實現するため、醫療擔當者の円満なる協力を得るために、適正なる單價を算定しなければならぬ。また社會醫療の内容を向上させる意味においても單價引き上げに反對する方々の納得を得て、大乗の見地から早急なる結論を得ることに努力し、速かに予算措置を決定されるように熱望する次第である。

(昭和三十三年十一月十日記)

(明三五卒 參議院議員)

南 熊 太

(昭八卒 久留米市通町八丁目二九一)

静かなる 秋の夕暮れ 遠氣笛

秋の蟬 声澄みとほり 森静か

百舌鳥 啼きて夕暮の 森静かなり

久々に 来たりし 村の水澄めり

久々に 来つるや 寺の法師蟬

蓮枯れて 畦道広き ところあり

初蜜柑 刺き薫らして 野道行く

初蜜柑 齒にしみわたる 散歩道

廃屋の 庭にコスモス 乱れ咲き

コスモスの 今年も 多し寺の庭

返り花咲いて 園児等 遊びおり

大學に關しての教育制度に就て

須 田 經 宇

十月の日本學術會議總會で一番論議に花が咲いたのは「大學のあり方」と言う問題であつた。學問の水準を高めるには大學の教育をどうしたら良いかと云うことが根本問題で、それに就いては現在施行されている大學の年數を画一に四年（醫學部は六年）でよろしいかどうか、大學院を現行の通りでよろしいかどうかと云うことにしほられて議論したのである。私は之に關聯して思うことは、抑々學問の水準を高めるためには先ず教養を充分身につけることが大切であると云うことである。如何なる學問をしても、その人の人物がだめならば何の役にも立たぬ計りか、或る場合には害を他に及ぼすことさえあるのである。従つて先ず人物をつくることであり、そのためには教養を高める教育を先ず充分にしなければならぬ。教養を高める教育は一朝一夕では行われないで學校での教育としては幼稚園より初めなければならぬのは論をまたないが、なかでも大切な年頃は十七、十八から二十才前後であり、この年頃は可成り自覺もして來るときであるので最も効果の上る時期でもあ

る。戦前の舊制の高等學校時代がこの年頃であり既に試験済みである。現行の六、三、三、四制に於ては高校時代でも教養を高める教育は受けており、大學では教養課程（醫科では進學課程）で行つてゐる訳である。然しながら高校時代は大學の入學試験が眼前にあるので、試験準備に追われ勝て教養を身につける勉強が充分に出來かねる。又大學の教養課程（進學課程）は一般に一年半乃至二年間で余りにも期間が短い。舊制の高校は三年あり、然も次に來る大學の入學試験はあつてもそれ程むずかしくはなかつたので、學校では基礎的の學問は教わるが、教養の面では自分で本を読み、友と語り、人生を深く考えたり、自己反省をしたり、互に切磋琢磨しむしる學校での教育以外で自ら教養を深めていつたのであり、この高校時代に人物を鍊つたので舊制の大學卒業生は一般に評判が良かったのである。そこで私は大學の教養課程（進學課程）を三年として、この時期に舊制高校と同様に教養を高め且、語學を大いに勉強する様にする。又現在施行している。専門課程の二年乃至二

年半は余りにも短いので、學部によつては三年とする。例えば工學部に於ては専門課程を三年とする。この様にすれば教養も充分であり、専門も充分に教育される訳である。

こうなると大學の就學年限が現在より一年多くなるし、學部によつては二年多くなる。そこでこの欠点を補う意味で大學入學受験資格を高校第二學年修了とする。そして高校第三學年は社會に出て直に役に立つ様に職業教育を施す様にすれば大學に入學するものはこゝで一年節約出来るし、高校丈で社會に出るものは職業教育を受けるので世の中に出て直に役立つて便利である。従つて大學を卒業するものは、

小學校（六年）——中學校（三年）——高校（二年）——大學（五年又は六年）

となつて在學年限は現在と同じか又は一年増加する丈である。而て大學の教養課程の三年間で舊制高校の三年間と同じ様な効果をあげることが出来るのである。現在の大學の教養課程では單位がとれなくとも専門課程の期間中にとればよろしいと云うところもある様であるが、専門課程では専門の學問丈で時間が一ばいなので、教養課程期間中に單位のとれないものは専門課程え、絶對進學させない様にする。それは舊制の高校では三年間のところ、四年も五年もかゝつた人があつた様に、この期間は余りあくせくさせず悠然とゆつくり勉強したいものは何年でも居られる様にし

ておけば、舊制の高校の如く自ら教養がこの時期に高まつていくものと考えられる。

む す び

大學の教養課程は三年間としてこの間に教養を高め且語學を充分勉強させる。

専門課程は學部によつては三年間とする。

高校の第二學年終了したものは大學に入學する資格を与える。高校第三學年は職業教育に重点をおく。

従つて私が考えることは六、三、三、四、制を六、三、二、五（又は六）制に改正する案である。

（本學教授眼科學、日本學術會議々員）



外來診療所落成式について

田 代 滋 穂

昭和二十年七月一日の戦災により甚大な災害を蒙りました本院も歴代院長の努力と同窓生各位の御援助御協力により着々復旧を見つゝあります。まことに御同慶に堪えません。

さて本院外来診療所は三カ年の継続事業として昭和二十九年から着工され、産業道路に面し、目下建築工事中の医学部基礎教室と対した位置に建設されたものであります。これにより旧正門は裏門となり、産業道路面に新に正門が設けられました。

外来診療所は白亜の鉄筋コンクリート二階建て総建坪一、八七四坪、工費総額一二七、七二六、〇〇〇円を要しました。

去る十一月六日、新正門の竣工式を兼ねて落成式が挙行されました。

式は秋晴れの上天気に恵まれた外来診療所屋上で午前十一時から始められ恒例の如く文部省教育施設部福岡工事々務所長の工事報告と諸行事、学長挨拶、文部大臣、其他の各祝辞、祝電披露、病院長謝辞、終つて祝宴に移つて新外来診療所が祝福されました。

工事経過は別記福岡工事々務所長千々岩氏の報告により御承知願ひますが、外来診療所の竣工により旧外来診療所は臨床各教室の研究

工事報告 (抄)

熊本大学医学部附属病院外来診療棟工事の現場監理を担当しました責任者として工事報告をさせて頂きます。

当附属病院は戦前約八七〇〇坪の建物がありましたが戦災に依つてその八〇%近くが焼失しました戦後遂次復旧されて来ましたが、何れも木造の応急的なものに過ぎず従つて基本的復旧計画も確立していなかつたものであります。

その後文部省内に大学病院研究会という委員会が設けられ大学附属病院の在り方に就て研究が進められる事になりました。当附属病院もこの研究会により慎重審議が行われた結果漸く基本計画が確立致しましたのが昭和二十八年度末であつたと記憶致します。

それによりますと総面積は一二、〇〇〇坪

究室として使用される事になり今迄病棟内に分散していた研究室は一カ所に纏まりました。外来診療所の竣工に引續いて愈々手術室臨床検査室等所謂中央診療所の建築更に臨床研究室、藤崎台分室の統合等いずれも焦眉の問題を残しております。同窓生各位にはこの後ともよろしくお願い申し上げます。

(附属病院事務長)

余の尤大なものであります。こゝに完成を見ました外来診療棟もその一部をなすもので面積一八七四坪総工費一二七、七二六、〇〇〇円であります。

病院の外来診療棟はその機能上から申しますと平家建が理想であります、敷地並に在来建物との関係上二階建になつたものであります。

外来診療と緊密不可分の関連を有する中央診療部門、薬局を含む管理部門の一部がこの外来診療棟に喰い込んでおりますし、暖房設備が未完成であり、外来診療所としての充分の機能を發揮出来ないのは遺憾であります。工事施工中大学御当局はもとより関係各位より与えられました絶ゆみなき多大なる御援助に対して厚く御礼申し上げます。

昭和三十一年十一月六日

文部省教育施設部 福岡工事事務所長 千々岩 助太郎

その後の大阪支部

牟田 哲三郎

本年度大阪支部総会は、母校から札幌での学会へ御出席の御旅程を繰上げて御来阪下さった世良教授を迎えて、昭和三十三年六月十六日(日)午後五時より燎泉閣で、江里口博士司会の下に開かれ、支部長の挨拶及報告(三一、一〇、齊藤真文博士が堺市教育委員に、三二、二、黒河内好彦博士が大阪市大講師兼桃山市民病院小児科長に夫々任命されたこと等)に始まり、引続き世良教授は万堂の拍手を浴びて立たれ、母校の現状を多数のスライドにより詳細御説明下さった。中には涙ぐましい想いをする一面もあつたが、さすがは国立大学医学部だけあつて遅々ではあるが再建途上にあることが判り希望が持てるほゞえましい面もあつた。その復興状況を眼と耳から識ることが出来て一同満悦の面持ちがみなぎり、母校との連りを一層緊密にするのに効果的であると信ずる。欲をいえばカラスライドだったらもつと良かったのと思つたのは私一人ではなかつたようです。

世良教授のお話が終つた頃は胃袋も空にな

つたようで、前に並んだ御馳走にとびつく有様、自己紹介も終つてアルコールの廻りも上々の頃、燎泉閣名物の日本舞踊等に打ち興じ或は学生時代の懐旧話に花が咲き、隠し芸もとび出す和かさで何時果てるとも判らぬほどだつたが、そこは熊杏魂とでも申すか九時前にはお行儀よく散会となつた。この日世良教授と御同期の協元秀義、安岡正威、長岡真夫諸先生の顔も揃つたが、何分卒業後四十年に垂んとすることとお互に初対面のような挨拶が交されたが、やがて記憶が蘇り一度に若返られる場面もあつた。出席者三十七名で仲々の盛会だつた。

終りにこの会に御臨席御報告下さつた世良教授並に御幹旋下さつた尾崎同窓会々長の御厚意に対し、支部会員一同に代り深甚の謝意を表します。(大六卒 大阪支部長)

附記

目下四名の名譽会員の外、正会員八十一名
支部長 牟田哲三郎(大六卒)
副支部長 富永 謙(大六卒)
幹事

齊藤 真文(大四卒)、脇元 秀義(大八卒)
養田 正朝(大一一卒)、犬塚厚生(大一二卒)
江里口春志(大一二卒)、河内 三宗(昭六卒)
金安 正行(昭六卒)、桑原 胤彦(昭一四卒)

岡田日向(昭一四卒)、黒河内好彦(昭二〇卒)
神田 孝(昭二一卒)

事務所

大阪市南区末吉橋通二丁目十二番地
牟田 病院内

(市電長堀橋交又点西)

電話大阪(五〇〇〇番(病院))
(三三八七番(支部長宅))



山崎春雄先生を訪ねる

世良 完介

山崎春雄先生は、大正二年の一月から同七年暮までの六年間、本学の前身、熊本医学専門学校の教授として解剖組織学を担当しておられた。先生にお教えを受けた同窓は大正十一年卒業生までであるから今は皆初老期を越えていられるでしょう。

先生は東大助手から直ぐ熊本へ赴任せられた。その歓迎会が二本木町一日本店で催されたが、主客の先生が仲々お見えにならない。お宿を探してみると、先生は金峯山に登つて居られたという、当時の語り草がある。

長身瘦軀・金縁眼鏡が光る、粋な美男でお

在した先生の教壇姿は、その頃の学生にとつて憧憬の一つであつた。私達は、先生と生理学の高安慎一先生とのお若いお二人を引出して、週末の登山旅行等を次々に催した。阿蘇山・金峯山・飯田山・三角岳、それから雲仙・霧島など、その頃の思い出は数限りない程ある。河内小天の蜜柑狩・住吉海岸の潮干狩・戸馳海岸で泳いだこともあつた。その頃阿蘇山に登るには大津まで汽車、大津から先は歩いて栃木温泉で一泊、翌朝あの広びろとした高原牧場を経て湯の谷から草千里、そして火口え。帰途は坊中か宮地に駆け降りて内牧温泉に泊るか或は一気に大津まで足を引摺つて終列車に間に合わせなければならなかつた。今日の汽車で坊中え、そこから山上まで舗装道路のドライブ、山上から火口迄はロープウェイという快適至極な行楽登山では想像もつかない難業であつた。そんなことから、この集りは、久住山・祖母山・市房山には、計画だけで到々、実行する機会が無いうちに先生は北海道帝大へ突然赴任せられた。

私達は、先生を引抜いていつた北海道の遠い夢の空を、地図を展げてうらめしく望んでいた。そして三十五年余の歳月が流れたのである。

今年六月末、学会があつて、私は初めての北海道に行くことが出来た。札幌の宿で、街の地図を展いて、先生のお邸はどの辺りかと見当をつけていると、その夜帯広市の中村重実老から電話が掛つて、『明朝札幌に行く』とあつた。老は私の同窓であり、帯広市で大きい産婦人科病院を経営している。私とは学校卒業以来の久闊である。そのかみの姿を偲びながら、翌朝を持つことにした。老のことだから、早朝寝込みを襲うのかも測れないという予感もあり北国の夏の夜は早く明ける。

朝の早い私には格好でもある。起き出て、日記をつけていると、果せる哉、六時半というに早くもベルを鳴らしてやつて来た。早速招じ上げて、さて、何から聞こうか話そうか、そわそわして、もう嬉しくてたまらない。一別以来、斯くも苦勞し、斯くも立派になつて呉れた老に、感激の涙がとまらない。二人の御息も揃つて学位をとり、病院経営も後顧の心配ないという。今晩は一席設けて、妻も息子も呼び寄せて君達に会わせようという。南国から、はるばる、さいはての北国に来て、これほどの温い友情に抱かれようとは、思ひもかけない嬉しいことであつた。朝食を共にしながら、私は山崎先生を訪ねたいという

と、『俺が連れて行く』という。早朝ではあつたが直ぐに行こうと、二人で先生のお宅訪問に出掛けた。

先生のお宅は北二条西二十三、宿から歩いて近い所にあつた。電車で行くなら、植物園の裏、土木事務所前で下車、札幌開発建設所を背にして、西えまっ直ぐに行くと右側に生垣を繞らし、広いお屋敷に高く聳えるボブラの樹、栗や桜桃の木を抱えた純洋館である。大正の終り頃、当時北大予科で独逸語教師をしていたコーラの夫人の令兄Max Hinderさんの設計監督によつて建築されたスイス山荘式の洋館である。昔、入江たか子主演の映画「リボンを結ぶ夫人」の舞台として写された札幌名代の邸宅である。玄関口のライラックは今花盛りであつた。応接間に招じられ、夏というのにストーブを燃やして、先生や奥様・御長男夫妻・お孫ひろ子さん方総出で、四方山の思ひ出話を映かせた。フト私は、何だか外国に居るような氣持になつて、独逸語でも話さねばならないような錯覚が起つた。

『君の名前は、珍らしい名前だつたので、そう、思い出しますよ。顔はすっかり忘れてつてた。随分年輩になりましたね。』

『先生は一時千葉の方にも行かれたのでは

ありませんか。』

『いや、あれは同性同名の別人ですよ。僕
は熊本からこちらに来たきりで動きません。』

淑奥様は、高岡玄信氏の養女であり、熊本
の御生れ、私と同じ位の白髪である。御長男
泰雄氏は北大出身、現在札幌通信病院の外科
部長であり、御二男武男氏は室蘭高校で英語
の先生、御三男英雄氏は札幌医大の助手、お
父様譲りの山男で第一回第二回マナスル登攀
のメンバーであつた。

先生は六十三才で北大教授を停年御退職、
名誉教授となられて、二年間御引退の後、札
幌医大教授に御就任になり、この四月には東
京での学会に御出張中突然御発病、約一カ月
間御静養になつて、飛行機で札幌の御自宅に
運び込まれたとお話であるが、今日では殆
んど全く御恢復になり、よくお肥えになつて
円やかな白哲温和な貴人である。

『昨年、東京で高安君に遇つたとき、高安
君は直ぐ「君はアボ体質になつたね」と注意
して呉れたが、僕には思ひもかけないことを
一目見ただけで、流石によくも診たものです
。全く的中してしまいました。』

『然し、もうこれという障礙も貽つていま
せん。教室にも自由勤めて出ています。』

とのことである。お話は仲々盡きない。お
名残惜しいが、あまり長くお妨げしてはなら
ない。私にも学会が始まつている時刻であ
る。先生の御健康と御長寿とをお祈りして辞
去した。

(三八六・二三)

随 想

町 野 保 雄

私は大正三年私立医専第七回卒業生で熊本
には竹屋、上野、内尾君等の同窓生が居てく
れて何斯とお世話になつています。又長男が
六反田先生の処で研究し三男が目下第一外科
にお世話になつていますので熊本との関係は
益々深くなつています。私は卒業後寸時陸軍
に籍をおきましたのでシベリヤ出兵と此の度
の戦争にも老骨として天津に出動し、糖尿病
で帰りまして聯合分会長として又郡翼賛壮年
団長、県協力会議員等をしていましたので追
放されました。その追放たるや解除の内命が
来ていて二回も解除取り消しの電報が内閣か
ら来た由で一番最後に解除されました。余程

罪が重かつた事と存じています。それが何か
の間違で永く学校医をしている関係で県教育
委員から次で文部大臣から教育功労者として
表彰されました。

柳川山門三池教育会よりは学校教育功労者
として顕彰録を作つてその一頁にのせられて
います。現在医業を長男に譲つて余生を送つ
ています。

柳川は鰻の名所で太田原君はよく鰻喰いに
やつて来ました。そして私の処の台所に安坐
して焼きたてを食つたものでした。余り食
過ぎて帰熊してから下痢したと文句を云うて
来た事も一回ならずあつた程でした。竹屋君
も来るには来るがそんな野人的行為はありません。焼きたての鰻の味は知らず冷えたもの
を食つてゐる様です。先年同窓会をした折に
竹屋、佐々木両先生がお出になつて大善寺
で富田君が世話して日本で筑後川のみに獲れ
る「エツ」魚を差上げる処だつたがあいにく
の大雨で獲れずに又の機会を約束してしまし
たが、富田君は死んで私は病気でそれが出来
ずに残念に存じていますが、その折に私方で
魚ではありながら「ワラスボ」と云う奴を差
上げた佐々木先生がお代りまでして食うて
戴いた事を今も家内が喜んで感謝していま

す。本年の初夏に同窓会を柳川でしたら熊本から北九州から沢山お集り下さつて有難く感謝しています。私は本年七月廿六日朝突然腸出血して意識を失ひ輸血で命をとり止めましてまだ元気がつきません。高血圧のため（二百七十mm Hg）に脳でなく腸の血管が破裂したとすれば此の上なき幸で、天がまだ生きる運命を与えてくれたと思ひ、又皆様にお世話になると存じよろしく願ひ申し上げています。幸い三男の嫁に熊本の西郷病院の長女が来ていますので今一度出熊して旧友にお目にかゝりたいと楽しんでゐます。

（大三卒・柳川市）



同期同門生への思い出

齊藤 忠雄

そうだ。大正七年五月のことであつた。當時私立であつた熊本医専を卒業して、校長であり県病院長であつた、有名な谷口長雄先生の門を訪れたのは――

一諸に谷口内科にはいつた同期生は四人で村上鼎君、酒井信之君、齊藤宗賢君の外、私

であつた。四人と言うと甚だ勘い様であるが吾々同期生の外には小出小一郎、上野鎮也、尾上久丸、相原正風、原田研一の五氏があつた位であるから、敢て勘いとは言われまい。今から考えて見ると、随分勉強しなかつたものだが、吾々ばかりではない、病院全体が勉強など考えても見なかつた頃で、物を覚えるのにも、総て自然にまかせ、積極的に物を覚えよう等と言う気持ちは聊かも無かつた様だ。学位を授けられる道もないし、又その野心もないし、日常の治療法でも会得出来れば、まづ満足してゐた為めもあるだろうが、又一面あまりに忙しかつたせいもあるであらう。

谷口校長が内科部長、酒井保先生が副部長で部長と副部長が毎日交代で新患と旧患の診察をされ、両部長が一週三日宛全入院患者を廻診せられる。つまり患者の方から言うに毎日部長が副部長の廻診を受ける外に、担任医員の廻診をも受けることになる。

その頃は県立病院であつたため、医者は医員とよんで居た。俸給を頂けない医者は副医員と称し、大概一年もすると、上が空いて、医員になつたものである。患者に対する責任は飽くまで医員にあるので、副医員は正式に

患者を受持たされない。それぞれ医員について下働きをするのみである。

一人で大抵十四、五人以上の患を受けもち、それに外来に坐わつたり、毎日の自分の廻診の外に、部長の廻診につかねばならず、仲々忙しかつた様だ。

医局の空氣は至つてなごやかであつた。然しなごやかな中にも酒を飲む組と飲まぬ組との別が生じたことは己を得なかつた。飲む組には上野君の外に吾々新人の四人があつた。私は飲む方ではないが、騒ぐのが好きで、自然飲む方の組にまわつた。

同期の齊藤宗賢君は脊の高い、色の黒い、学生時代相当に遊んだためであらうか、極めて角のとれた円満居士であつた。一年も医局に居たが、鹿本の嶺間村立病院に赴任し後郷里の小川町にて先祖の後を受けて開業して居たが、もう十四、五年にもなるか、脳溢血で急死した。酒井信之君は脊はいたつて小さかつたが、なか／＼のスポーツマンでビンボンやテニスが優れていた。齊藤君に引続き医局を出て、兵庫県小代町立病院に赴任、一時福岡県二瀬炭坑病院に転任、後小代町民の懇望いなき難く、再び小代町に行つて開業して居たが、三年前肝臓癌で遂に死亡した。玉名

郡梅林の出である。村上県君は半年位医局に居たが、京都大学の医化学に入り、一年も京都に居たか、再び医局に返り、内科が二つに分れた時には第二内科の初代医局長をつとめ、後郷里尾道で開業して居たが、一昨年からまた脳溢血で死んでしまった。その頃から既に頭の禿げた、堂々たるお医者さんであつた。三人とも酒を飲んだ所為であらうか。

齊藤君が死んだ頃までは、こちらも四〇才台で、死に對し切実な感じを有たなかつたが、酒井君や村上君の死亡に直面すると、次は慙々僕だと言う感が一しお深く、何んとも言えない淋しい氣持ちが起る。

然し四人中に一人残つて居るので、三人の短命を代償する意味で、自分一人は長生き出来るであらうとか、廿五才の時脚氣衝心で死んだと言う噂が、あちこち飛んだことがあつたので「死んだ噂のあつた人は長生きする」と言うあられもない座興話を、むりに信ずる様につとめて自ら慰めている。

その外原田氏は遠い昔に死んだが、小出氏は一昨年から脳軟化で死亡、あの頃九人の医局員中五人は故人になつたわけである。案外長生きは出来ぬものと言うことを覺つた。兎に角死んだ人に対する思いは深い。今東京帰

りの汽車の中で、その頃の同門の士の思い出を、それからそれとたどっている。

(大七卒・熊本県医師会長)

同窓親睦

岡島 寛一

同窓会会報の第一号が出た時も「何か書け」と云われたが、遠慮した。次いで第二号を出すというので、これ亦「今度は書かニヤいかなばい」と編集者から前以つてクギをされたが、今度までは遠慮することにして、筆を執らないでいたところ、締切日も過ぎてから矢のような催促「まだ私などが出る幕ではないとは思ふのだけれど、とうとう負けてとにかく書くことを引受けて了つた。それとこのも、私自身雑誌の編集をしていて、原稿の集まらない時の憔悴感を身を以つて痛感しているからである。只、私は元來極めて遅筆で、しかも氣が落ちつかない、なお一層筆が運ばず、そんな時に強いて筆を執上げてみたところでロクなものは書けないので、それを想うと今日も一向に筆が進まないのだが。

こと改めて云う迄もないが、同窓というものは奥になつかしいものである。それも母校の地元にあつて動かず、右を見ても左を見ても同窓生ばかりの環境に在るとそう迄も感じないことであるが、一たび母校の地を離れて、同窓生の少ない他郷に行くと、この感が一入深い。私は、大正十五年から昭和十九年まで名古屋市中に居たが、当初はあの大名古屋市中に同窓というのが一人も無く、昭和になつて一人二人とやつて来た人も多くは役人か会社関係の人で、来たかと思つと一、二年で転任して行つてしまふので、実に何となく寂しいものであつた。だから同窓生が名古屋を通ると聞いては厭まで会いに行く、熊本で発行されている新聞雑誌等が送つてくると、まず第一に「人事消息欄」を抜いてそこを眼を走らせるといふ工合で、この氣持は人によつて多少の差異はあるが、大体同じであるらしい。この意味からだけ云つても同窓会々報の発行は意義がある。

それに近頃は何かという団結の力が大いにモノ云う時代である。だからと云うので、それを悪用する意志は毛頭ないが、善用するぶんには文句はなからう。そうした場合、同窓会というものが結成され、その機関誌があ

るという事は何といつても心強い。おたがい同窓生が何事によらずガツシリと手を組み合つてゆきたいものである。

(大十二卒・熊本市衛生部長)



卒業満二十五年を

迎えて

貴田 丈 夫

昨年本会報の編集の御手伝をして、同窓会員の方々から喜ばれて早一年、第二号の刊行の時となつた。本会報の誌上から同窓の方々に昭八会の級友に御挨拶申上げる事にこの上ない、なつかしさを覚える。もうお互に五十才前後となつた。往年のさむらいもさぞや光頭を輝やかし、白髪をなびかせて、千変万化して大家となられておる事であろう。級友野坂君は母校の耳鼻科教室に采配をとり、三上君は岡山大学の法医学教授に、南君は久留米大学の眼科教授におさまり、吉永君は勝屋教授の良き女房役として敏腕をふるい、筆者は先輩長野教授の下にあつて、相不変大原菌をいぢくつてゐる。又熊本市内には熊谷、松熊、小島宮原君を始め一一名開業して市医師会の中堅

として活躍し、その他県下にては早野、信岡、笹原、島田君等約七名が夫々磐石の地歩を固め又近県にては菊川、近藤、時松、上山、下山の諸君が堂々たる病院を経営していると聞く。

又清水、坂本、中尾、山口、米田君等は公立或は会社病院長として名声を博し、その他の級友も亦名医、哲匠、流行医として寧日なしと聞く。真に多士済々心強い限りである。

在学当時より陽気で、派手で、じつとしておれなかつた性分の昭八会の空気は今も尙盛んである。去る昭和二十八年卒業二十周年記念品を送り一夕の歡を盡したが、以後毎年次々と卒業二十周年記念謝恩クラス会が行われている。いゝ先例を開いたと昭八会一同誇らしく思つてゐる。所で昭和三十三年は卒業二十五周年である。又再び旧友一堂に会し恩師を囲んで、友情を温め、人工衛星の飛ぶ今日、月世界修学旅行の相談でもしようではないませんか。人世五十、まだこれからですぞ。

〃山は大阿蘇煙は絶えず……

河は白川は……ラッショ、

ヨカ、ヨカ、

(昭八卒・本学助教教授小兒科)

会報に寄せる期待

六反田 藤 吉

終戦後われ／＼の同窓会名簿が発行されたのは今度で四回目であつた。名簿作りの手伝いをしてみると、卒直に云つて名簿編纂委員ほど割に合わない役はない。手間と時間のかかる割には仕事か地味で映えないのである。発行が一寸おくれるとあちこちから「まだでいいのか、何をぐず／＼しているのか。」と御叱りをうける。その度に「もうすぐできますから。」と一々御詫びをせねばならぬ。印刷が出来てヤレ／＼と手にとつてみると、下司の智恵は後からで、ああすればよかった、こうすればよかったと悪い所だけが目につき、着手当時の意気込みはどこへやら、發送するにも気がひけるという始末である。そして、それが会員各位の手に入ると、途端に「名前が違つてゐる、順序が悪い、おれのことか間違つてゐる。」などと、小言やら批評やらがとびこんでくる。全く、引合わぬ仕事ではある。然し、これも何かのめぐりあわせかと不運を諦めて、この次こそは汚名を返上したいと力んでゐる次第であるが、それにつ

けても、名簿作りの度毎に痛切に感ずることは本部と支部又は会員とのかねがねの連絡が不十分なことだ。かねての連絡さえしつかりついでおれば、名簿作りも短い期間で正確なものが出るのであるが名簿作りが初まつてから問い合せたり調べたりしている内にどん／＼時間は経つて了い発行期日はおくれ、住所は異動する。こうしてかね／＼の連絡の大切な事をつく／＼思い知らされるのである。昨年秋同窓会が再発足してから今度の発行で第二回の会報が出るので、今後はこの会報が益々整備せられこの会報を通じ、支部や会員の動きがはつきりとわかつてくるであらうし名簿作りもずつと楽になるであらうと私共の期待は甚だ大きいのである。特に、卒業後五六年という処の実態がなかなか掴みにくいので仕方なく在学当時の原籍を書かねばならぬようなことがあつて、実情にそぐわぬ点が多いのでこの辺りのクラスではクラス毎に連絡委員を設けて頂いたら万事好都合に行くのではあるまいか。兎に角、本会の発展と共に、会報も盛となり、これを通じて同窓各位の動静が、手にとる如く本部にわかる様に渾然一体の実を現わしたいものである。

(三二、一一、二五)
(昭六卒・本学教授微生物学)

秋冷の候医学部同窓会愈々御発展の段
慶祝に存じ上げます。

陳者当八幡市に於ては九月二十七日を以て熊大医学部同窓会八幡支部を結成し不肖山隈が支部長に推されました。

就きましては今後一層の団結と緊密な連絡を保持する考えて御座います。

尙本年度申出の寄附金は乍延引会員の申合せに依り総額壹万円也を御送附致します。

何卒ぞ御收納下さい。

右第一回の御連絡を申し上げます。

敬具

昭和三十三年十一月八日

八幡支部長 山隈 慎一 ㊦

熊本大学医学部同窓会

尾崎 会 長殿

旧第五高等学校寮歌（明治三十八年）

「武夫原頭に」

作詩 故 惠 利 武

武夫原頭に草萌えて 花の香甘く夢に入り
竜田の山に秋逝いて 雁 遠き月影に
高く聳ゆる三寮の 歴史やうつる十四年

それ西海の一聖地 濁世の波をとほにせき
健児が胸に青春の 意気や溢るゝ五高魂
その剛健の質なりて 玲瓏てらす人の道

時潮のめぐりたゆみなく

移りてこゝに十年の
思ふい狂ふ胡北の地 断雲乱れ飛ぶ所
斬魔の剣音冴えて スラウの末路今ぞみる

時艱にして義を思ひ 塵世に節を偲ぶかな
あゝ新興の氣を追ひて 浮華の巷に吾たてば
思ひは馳する朴訥の 流風薫る銀杏城

さらば吾が友叫ばずや 時と人とを論すべく
見よ竜南に一道の 正義ありてぞ日の本の
青年の名に力あり 二十世紀に光あり

母校えびひ學校保健學講座開設を

小田 一 昭

一昨年の春、熊本小兒保健研究會發會式の席上私は現下の国情に鑑み小兒保健、就中學童保健の重要性を力説し、大學醫學部に於てもこの際早急に獨立した學校保健學講座を設置し、國の政策科學として學校保健學を取り上げてほしい旨提言したが、人工衛星の登場により一國の「政策科學」なるものが、國の興亡に如何に大きな役割を持つかの感を更に一層深くした次第である。

敗戦後祖國再建の基礎的要素の一として、次の世代を育む兒童生徒の健康保持増進—それは身体的にも精神的にも—の問題があることは、誰しもが是認して居るところであるが、その色彩が今尙鮮明でないのは誠に嘆かわしい極みである。非難する意味ではないが、政治家の仕事として道路や橋の建設は派手で人目を引き易く、家庭でも床の間は綺麗だが台所の學校保健はおろそかにされている。この際爲政者に是非お願いしたいのは、學校保健學を國の政策科學の一つとしてもつと旗幟鮮明になるよう施策をしてほしいと云うことである。

學校保健學とは何か？その範圍は極めて廣く一概には表現し得ないが兎に角、自主的健康人を育成する爲に、健康そのものを主体的にとりあげ兒童生徒の現在の健康を確保し更にそれを増進し、正しい健康觀とそれに基く保健活動を実行する能力、換言すれば何事を行うにも健康という立場から自主的に判斷し實踐する能力を養成する総合的な營

の學問である。この學校保健は今や新教育の本流に溶け込んで居るもののその發達はまだまだ幼稚で前途尙遠慮と言わざるを得ない。何となればその体制が今尙未完成なために現在大學新卒の學校教師は保健体育免許狀所有者と雖も、概ねそれは体育專攻者であり、學校保健に對しての理解が乏しく、健康教育擔任教師としての資格も亦不十分である。このことは畢竟學校保健學未發達のために、大學の教育課程に於て學校保健の單位を必修科目とする專任教授が居らない結果に基くものであり、文部省自体に於てさえ醫學專攻者は僅か五指を屈する數にも足りない現制度の貧困さに由來するものと思われる。

従つて學校醫自らは、學校保健の現場指導者として極めて重要なポストを占める訳ではあるが、現在のところ自啓自發これを獨修するより他に方途なく誠に寒心に堪えないものがある。兒童生徒の健康如何が國の再建に及ぼす影響の重且大なるに想到するとき、この學校保健學をば是非とも國の政策科學として取り上げて頂き急速にその体制を整備して各層の陣容強化に邁進あらんことを祈念して止まない。庶幾わが母校に於て万難を排して豫算獲得本邦隨一の學校保健學講座の開設成らんことを。

以上重ねて請願し同窓會々報の貴重なる一頁を汚させて頂く次第である。(大九卒・熊本縣醫師會理事・熊本縣學校醫會理事・熊本縣市學校保健會理事)

學校醫會理事・熊本縣市學校保健會理事)

みを教える學問である。即ち醫學と教育學のミックスで出來た一新分野

工、椎葉を尋ねて

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす。



津留唯信

九州山脈の 秘境を尋ね

つた平家一門が都を落ちてより、一の谷、屋島、壇の浦と相次ぐ戦いに破れ、うらぶれの武者達が遠く九州の山奥に安住の地を求めたのが椎葉の里だと言われている。

著れる者は久しぶらず、唯春の夜の夢の如し
〃とは平家物語の一節であるが、栄古盛衰は世の習い、とはいひ乍ら誠に世は無常である。かの豪奢をほこ

この椎葉は黒潮躍る太平洋を左手に眺めながら、延岡から汽車で南下すること約四十分足らず富高と言う駅に着く。日向市である。此処から耳川に沿つて、西の方、山岳地帯へ入れば、何時しか耳川は溪流の様相を帯びて山々の間を縫うて流れる。耳川の兩岸は鋭く切り立ち、仰げば万丈の山となり、臥せば千尋の谷となる。上椎葉迄八〇有余軒、すばらしい眺望の連続である。時に狹隘な道路を高速で飛ばすと、手足には何時しかべつとりと油汗がにじむ。恰も水面迄、四五米、水深三〇米と言う処にトラク転落現場をみせられ、将亦〃こゝ三日毎日落ちた〃等とおどかさ

冷汗三斗の想い、来なけりやよかつたと悔やまれる。我等は幸いに事故もなく、この景勝を眺めつゝ椎葉の里に着いたのであるが、今でこそ橋梁も幾多架けられトラク・バス等の走る道路もあるが、その昔よくも亦、都を遠く人跡未踏のこの山中に來りつるものかと思わずにはいられない。毎日新聞連載中の富田常雄の新源平太記のストーリーは諸塚から椎葉の里にかけて展開されている、那須大八郎と鶴富姫のランデヴーの個所も、諸塚・椎葉両村の境、耳川の主流と支流である十根川の注

ぐ処だとなつてゐるが、今ではダムのために満々たる水を湛えて蘆の葉をよく中洲等はな、那須橋という巨大な鈎橋が架けられてゐる。九十九折の道・青の洞門もどきの隧道を通れば白亜の巨大な建物が眼下に見える、これぞ九万KWの出力をほこる上椎葉発電所である。更に行けば鉄筋三階の庁舎椎葉役場がある。この一帯が上椎葉の町である。此の上椎葉はダム完成迄、従業員壹万数千を收容し山奥には珍らしい活氣横溢した蜃氣楼の大都会が営まれていたそうである。街の中程の老杉茂る処に間口、十三間半の大きな、而も古風な蘆ぶきの家がある。これが鶴富屋敷である。石垣の前で車を降り、礼を厚うして参観を乞うと（〃熊本大病院〃の值うちのお蔭で……）出された系図、その他を拜見し乍ら古老の昔語り耳を傾ける。軒下に佇めばこととわずとも、峨々とそびゆる四囲の山々聳立する古木、その昔を語るかの如く、那須大八郎と鶴富姫の悲恋物語にその昔が偲ばれて、想いを遠く寿永の昔に馳せることが出来る。

炊煙たなびく夕べの丘に、子守歌代りに口ずさむ乙女の〃ひえつき節〃唄声がひびくらしの聲と共に哀愁は一入深い。椎葉の里の日は

暮れ易い。再び車に乗つて上椎葉ダムの上に立つ、一〇〇米に垂んとするアーチ式ダム、夕陽をあびて輝く水面、山の緑を映して黒い湖、美しい中に又かぎりなき恐怖が迫つてくる。降りて下に廻れば、堰堤天空にそびえ視界が半減する。この巨大な堰堤をつくるには遠く延岡附近から砂、セメント、その他の器材を九州索道のケーブルに依つて運び込まれたものだと言われる。

Ⅱ、九州山脈の密林を踏みわけて

諸塚や椎葉と言つても広い、人跡未踏、千古不斧の処が少くない。耳川沿いのこの街道から、一步山中に入れば何となく心細くなり軽い腐寒さを覚える。林道・釣橋等はまだよい、山巡にかゝり、岩をかむ溪流を渡り或は急流を越えた処、天然の要害に囲まれた地にポツリポツリと桃源境がある。これ等の小盆地には農耕を営む人々が住み、自給自足のわびしい暮しをしている、さすがにその昔道手を避けた平家の末裔ならんかとも想われる。更に深く山中を踏破すれば遠く現代文明から全く隔絶された秘境がある。電燈、ラヂオ等望むべくもない住いである。蜥、グロテスクな山蛸、青大将、蝟、足は超々として進まない密林には仏法僧、梟、鷲、巨大の山鳩、小

じゆ鶏、雉、そして名も知らない数多の野鳥の嬌声に明け暮れる。野兎、野猿、猪など野鳥野獣の世界に連る原始時代そのまゝの秘境である。この秘境と連る山道はまた緑の地獄道でもある。巨大な蜥にかまれると、大人でも3、4ヶ月は臥床し、死亡するものも少なくない。この秘境はその昔精密を極めた陸軍参謀本部地図にも誤まれ、或は記載漏れしていると言う処である。日常我等の使う日本語さえ不足している様で理解は出来るが充分使い切れない人々が居る。我々外来者には奇異な眼・警戒心に満ちた眼で、樹陰、物陰等から物怖ぢげに覗き、中々語り合つて呉れないが、危害を加えないお客さんであると知れば笑いかけ、親しみを生ずるとグロテスクな親愛の情を示している。尊敬すべき人等の區別はわかるが、敬語等あつたものではない。衣食住も極めてお粗末で、性生活も亦雑婚の様相を呈しているらしいと言つても必ずしも女尊男卑ではない、少くとも我々の社会に於けるよりも、男女より平等らしく、神代の昔をおもわせる。これ等の人々も亦近代文明に残された一群の天孫民族であるが、何時の日

に文化の灯に浴し得ることであらうか。

然し、椎葉の里だけは上椎葉ダム、発電所の建設により時代の脚光を浴びて村のセノタに幾多のモダンな鉄筋の建物が立ち並び映画館のスピーカーから流れるニュースや流行歌等が山間にこだまして、眠る深山に黎明を告げている。

Ⅲ、諸塚にて

椎葉にゆく途中、この耳川沿いで一番大きな街が諸塚村・新塚原である。言うなれば、オシッコ停車場でもあるけれど、流石に諸塚村のセンターであり、村役場の庁舎を始め、山間壁地には稀れに見る立派な病院があり、四・五軒ではあるが旅館、小さい乍らの百貨店、飲食店等各種店舗も立並び、小ぢやな遊廓迄ある。街の北部には役場・病院を始め農協・法務局出張所・郵便局・警察・幼稚園・公営住宅等がある。その他の部落は多くは椎茸栽培を主として生計を営む農家である。この耳川沿いに西郷・諸塚・椎葉と続くが共に椎茸と木材によつて、その生計を維持すると言われ、上椎葉の九万KW・新塚原の六万KW等を始めとし、巨大なダム・発電所の建設で栄えたと思われる村々である。古老の話に依れば、イカダを組んで、この耳川の急流を下つた昔と、ダムが出来た今日とは、川底も浅くなり、水量も少く、景色も悪くなつ

て了つたと数ずるが、春は花、新緑の初夏、秋の紅葉、白銀に輝く九州の屋根の冬の眺望或は、四季の山々の間を走る銀蛇の流れは奇岩に砕けて散る溪流となり、将亦懸河の滝となり、或は滴々と溪水を湛えて淀む、深淵に影を写す天然の美しさは、えも云われぬこの村ならではの感が深い。〃耳川〃を一名〃美々川〃と呼ぶのも亦宜なる哉である。然しこの耳川が幾多の無限の恩恵を与えていると同時に又幾多の尊い人命を奪い乍ら青く淀み永遠の沈黙の流れをつぎ替えているのは無気味でもある。

この村には平地というものが少く、山腹乃至は丘陵地帯に居住するのは〃天族民族〃の後裔の類ならんか、部落の人達は「大昔は高い処に住んでいたのだから……まあ色々の事情もあつただろうし、今尚住んでいても左程不思議がるには当らない」……らしく冗談に交えて語っているが、我々の同情する程、不便・不自由さは感じていないらしい。

山の天候は変り易い。快晴の日の清々しさは高山地帯の部落であればある程格別であり、その心地良さは筆舌には盡し難い。然し一度び雨となり霧立ちこむれば、屋も視界は全く閉ざされて、山中に心細さ言わん方なし

である。ましてや暴風雨の暗夜の淋しさは、むしろ恐怖の夜と言うに値しよう。

それでもこの新塚原にいれば山間僻地、九州の山奥と言う感じは薄れる。自家用車を持つ店舗も多いし、電気洗濯器、扇風器等は申すに及ばず、オートバイ・電気冷蔵庫等或は亦自動耕うん機に到る迄備えている家庭が少くない、我々の日常よりも多くの文明の利器が取入れられている。また此の部落からはるか山奥にトラックが木材搬出に上るし、單車も疾駆し交通量も多く、山や谷にこたまして、仲々賑やかである。平地がないと言つても商店街や役場等の野球チームは仲々うまい。一寸我々医師級では齒もたたない。

さて、何処に行つても此処の好奇的な話として珍重がられるものに「夜這い」の話がある。二〇年程前は随分行われていたらしい。親が発見して腹を立てたり妨害したりすると後が大きい。玄関や機側等は一夜で蕨原の花が咲き、翌朝の掃除は又大変であり、旬余にわたつて異臭に悩まされねばならなかつたそうである。〃お、青年か〃で親もすまし或は知らぬふりをしていなければならなかつたと言う工合であつたらしい。然しこの蛮風も今は全くみられなくなつた。世間では、

戦後性道徳頹落となげかわれたにも拘わらず、この地方の人々は意志堅固であり、この蛮風驅逐に邁進したことを村人の名譽のために紹介しておこう。一般村民の衛生知識は相変らず低いが、村長始め村の知識階級に属する人々は夙に心を向けて、我々の意見にも傾聴して呉れ、村民の福祉・文化向上・その維持運営に協力を求めている。この村立国保病院は一般病棟、隔離病棟併せて五〇床ばかり、着々と村民の要望に答へつゝあり、耳川沿いの医療のセンターであり、大学病院的役割をも果さねばならない。我が熊本大学の出張所みたいなものである。西郷、東郷と続く病院に在勤の諸先生方も皆同窓生の諸氏である。

ところで此の村は広い、山間に点在する部落から此の病院に来るには一里二里はよいとしても、四里五里もの遠隔地から一日がかりでやつて来るし、更に遠くは椎葉の山奥から下りて来る患者も少くないのである。又往診に四里も五里も走るわけであるが、九十九折の山道、四季に映ゆる景勝の……と言つても、眼下に横たわる眼もくらむ溪谷、デコボコの細道を自動車で走れば、スリル万点、手に汗握るところか、命のちぎまる思いの時が

あるが馴れれば楽しいドライブでもある。然し林道は走れても山中深く山路を一時間以上も「テク」らねばならないこともある。かゝる家は多くは昔乍らの大家族であり百年もの昔に建られた家も少くない。案内人の後に続いて患家を訪れると、主人以下丁重に、礼を厚うして、往診に対する慰労の詞を述べ、家族の主だつた大人達が代る代るの挨拶に出てくるので診察に手間がかかる。中にはその昔の古語さえ交えて、理解するのに難渋し、通訳がほしいこともある。診察を終えると酒肴が出る。ビール・酒はまだよいが、焼酎・どぶろくに到つては下戸の我輩は全く困惑させられる。肴は山の幸が主で椎茸を始め、やまいも、木の芽、卵料理、鶏、山鳥、野兎、果ては猪料理の御馳走に与ることもある。心からその労をねぎらつてくれるのである。

この地方の交通には徒歩か自転車为主であり、馬や牛等実に少いのはむしろ奇異にさえ感じられる。山中深く散在する部落の人々の中には下界に下ることが殆どない輩もいて兵隊にとられて街の色んなものを始めて見たと言ふことだ。女・子供や病人が助かるのは林業会社のトラック・三輪車等であらう。この地方で交通法規を遵守させればこの人々の足

を奪うのも同然である。或る雨の日の往診先で「嫁女を一つ乗せてもらえんだらうか」と言うので、此の土砂降りに三里近くも大変だろうと気安く引受けた処、帰途を待ち受けているのは何ぞ計らん盛装の花嫁さん而も総勢六名のお歴々がのると言う、この花嫁御寮は雨の山路一里半ばかりを歩き雨の中に野付むこと二時間余り、感心するやら驚くやら、山の嫁入りも又大変なことである。富崎名物、「シャンシャン馬」も当地では名物でないらしい。

さて、教育であるが、山間地の教育は中々複雑且つ至難である。この村にも分校が幾多あり、複式教育をやつており、又色々の不便・困難もあるらしいが、山の子等は小学生でも一里半・二里の山道を遙しとせず、嬉々として通学しており、中学生になると三里も離れていると言うこれ等深山の子等は下宿が不可能であれば、せん方もなく、通学不能であり、十七・八才頃になると自然卒業と言うことになるそうである。先生達も中々長くは続かないらしく、単身赴任の人が少くないし、勤務交代の春三月が待遠しいそうである。然しかゝる恵れぬ山の子等を相手に熱心にその若き半生を捧げんとする先生方も亦決して

少くはない。

ところで、この地方では何等娯楽に恵まれぬけれども魚釣りや夏の魚突きは面白い。山間の溪流には、エノハ・イダ・マス・アユを始めふな・うなぎ等も多く淀む淵には鯉・鮒・俗語で言う「はえごろ」等がおりにさつま等の爆弾釣り、鮒はみづの一本釣り、エノハ・イダ・マス類はみづやセムシで良く釣れる。一〇〇匁前後の獲物も多く素人でもよく釣れて、その釣上げる痛快さはまた格別である。又潜水して、泳ぎ廻るアユ・エノハ・イダ等を追い乍ら刺す魚突きも面白く、この地方では子供の頃からやつていて、恰も海釣の如く、その巧さには一驚するのである。那須小太郎隆久は今でも生れる。

この地方は九州の屋根であり、春は花、山つゝじ、桜を始め名も知らぬ草木の花が色とりどりに咲き乱れ、夏の新緑に藤の花、秋の燃えるばかりの紅葉と、その四季とりどりの美しさ言わん方なしである。

九州縦断産業開発道路の計画もあると聞くが、それに魁がけて熊本・馬見原・三ヶ所・諸塚・日向と九州山脈横断道路の完成する日も差程遠くはないという。

熊本、浜町、馬見原、諸塚、日向市と東西

に結べば、愈々、九州山脈の開竅と共に観光の上からしても、再び大きく、クローズアツプされる日も近いことであろう。

村人達の唄う古めいた朗々と声量あふれる正調「ひえつき節」や「刈干切唄」が今でも



町医春秋

大森弘正

蠅の真似したる踊の紹の羽織

学生の頃、病理の鈴江巢場先生が首唱せられた句会をしばらく続けましたが、以来そんな風流心を忘れて唯ひたすら軍に従ひ、又終戦後を生き抜いて来たのですが、町医になつて小十年、日々の味気なさに何か心遣りにと

思つて句を始めた次第です。さて俳句と申せば、学生時代の鈴江先生の句会しか識らず、従つて句と云えば真先に先生のことを思い出すのです。当時あのグループに居られた方々は「今もあり〜」と思ひ出せて懐しい限りですが、——先生が句会で二度ばかり、蠅の真似

耳朶に残り、あの哀愁を帯びた切々と胸に迫るメロディーが、雲に連なる九州山脈の彼方から遠く低く流れて来る。

(昭二十八卒・熊大小兒科・再春荘)

をした入神の妙技を披露されたのを御記憶にならないでしょうか。私は鈴江先生と申せばすぐあの踊りを思ひ出すのです。久振りの作句の第一句は、従つて先生を懐しむの余り、蠅の踊りとなりました。

死児の化粧唯に悲しき蚊の羽音

博多の地で町医となつて、一番辛かつたのは、当地名物であつた疫痢で数人の幼児を死なせたことです。学生時代、小兒科が苦手で、耳鼻科に入局し、陸軍にとられて上司の命に依つて内科を専攻させられてきたのに、町医ともなれば否応なく、小児の患者も対象

としなければならず、こんな悲しい目にも会わされるものです。

亡き母に似て若白髪魂祭る

終戦から戦後にかけて、私もその例に洩れず、随分と苦勞しました。お蔭様で頭髮はすっかりと霜をおきました。四十をこそこで亡くなつた母がそうであつたように、私も四十過ぎたらもう真白です。昨秋、熊本で二十年振りに同窓会がありました。一別以來、お互いに顔を見合せてその髪は或は薄く、或は白く、暫くは口も利けないくらいの変りようで驚いたのです。か、当夜列席された明石真隆先生を初め旧師の先生方すべて御健在で「秋灯下恩師健在弟子等老ゆ」と感慨一入でありました。

暮れ残る脊振に寒し茜雲

冬の水白魚棲めばなごみけり

寒暑雨雪夫々に姿を変えて、日常身近にあつた金峯連山が、他処に出ていると懐しまれてなりません。当地にはその代りに脊振連山が東方に聳えて、そこから清流となつて那河川、室見川が市中を流れて今も白魚が泳ぎ早春の白魚料理は名物となつております。

在福十年、博多弁に馴染み日頃これを弄して
います、熊本訛りの抜けよう筈もなく、
時折「先生は熊本でしようもん」と訊かれ
て、やつぱり俺は熊本人かと一抔の郷愁を覚
えるのです。

どんたくの囃さて通る屋敷町

熊本のボシタは今なお盛んに行われている
こと、思います。賑やかなのは、繁華街だけ
のことで、京町、新屋敷といった所は、今も
お祭り騒ぎを遠く、静かなことでしょう。博
多も私の住んでいる辺りはそんな場所です。「ど

んたく」と謂えども静かなことです。

埋火や茂吉の「赤光」巻指かす

学生の頃私は俳句より短歌に熱心でありま
した。加藤七三先生の金曜会に出席して、随
分と楽しい思いをさせて頂いたのですが、
先生の清く寂しい御終焉を憶つて心痛いま
す。当時の同人諸兄、御健在でしょう。一連
の会の一齣一齣が、昨日のことのように鮮や
かに思い出されて懐しいことです。作歌は止
めています、尙詠むことの勉強は続けてお
ります。
(昭十一年・福岡市)

器の中の命をみつめて三十年

小 玉 作 治

一九二四年も終りに近ずき、私はコペンハ
ーゲン・カールスベルグ研究所（セイレンセ
ン教授）における蛋白質関係の見学研究を一
応すませて、ウイーンのパウリ教授の所に移り
蛋白質の物理化学を少し勉強しようと思つて
出発準備をしている時、たまたまコペンハー
ゲン大学の病理学教室に、フィッシャー（当
時学士で、助手）という研究者があつて、生

きた組織をガラスの器の中に養い育てる研究
をやっているという事を耳にしました。私は
ヨーロッパにおける二年の研究期間の前半分
を、蛋白質の物理化学的な見学研究に使い、
後の半分を、生きた物についての物理化学関
係の研究室で過したと考えていたのですが
そういう意味での生きたものの研究には、ど
こがよいかについて、まだ何も深く考えてい

ませんでした。私はフィッシャーさんの研究
の話を聞いて、これは大した研究だ。これこ
そ自分の念願している将来の研究になりそう
だと感じて、早速その病理学教室を訪ねたので
した。このへんの事情は前にローマ字雑誌
「funzi」に書いたので、ここでは省きますが、
とにかく予定通パウリ教授の所の見学研究を
すませ、またまたコペンハーゲンに舞戻り、
フィッシャーさんの所で、所謂組織培養とい
う新しい領域の研究の糸口をつけてもらった
事はいうまでもありません。恥かしくも、う
かつたつた事には、この組織培養という方法
は、もう十年以上も前、一九一二年、ロック
フェラー研究所のカール博士によつて發明
され、既にかんりの研究が進んでいる事を知
らなかつたのです。その後ベルリンのダーレ
ムのワールブルグの研究室で、同じく器の中
の命を扱う組織呼吸の見学研究をやり、やが
て日本に帰り、そして縁あつて熊本の大学に
落着く事になつたのは一九二八年、昭和三年
の正月のことです。

その頃は、日本では勿論外国でも、生理教
室で組織培養や組織呼吸の研究をやっている
所はありませんでした。何にもない熊本にき
て、それを始めたのですから、張合があつた

とも云えましようが、盲蛇に怖じない、といったところでしょう。

組織培養という研究には、実に色々の問題が含まれておりますが、現在これから本当の研究が始まるというような状態ですから、その頃の幼稚さはいうまでもありません。これから本当の研究と申したのは、その頃から最大の問題として取組まれていたのですが、培養組織の生長を促すものの本体が何だ、ということが少し分りかけてきたからです。私共も培養研究の初めからこの問題にとつきみ、戦争中の空白がありましたが、随分苦勞をしてきました。それ等の結果をここに御紹介する事を省きますが、こうして器の中の命をみつめて三〇年を過しました。間もなくこの大学の現役生活から立去ろうとしている今において、私は喜びと誇をもつて、教室の古閑陸好講師の研究を、同窓の皆さんに御披露する事が出来るようになった事を、誠に幸いとするものであります。古閑君は昭和二十六年以来、困難なこの問題に取組んで、それこそ夜となく、昼となく、黙々として骨身をけずる研究に励みました。今までに既に多くの世界に誇るべき優れた研究の結果を挙げつゝあるのです。詳しい研究の経過は御本人から、

次々に Kunamoto Medical Journal に発表する運びになつていますが、今までに得た結果のあらましをここに簡単に御紹介する事にいたします。

先づ第一に組織の細胞を器の中で育て殖していくには、今までは胎児の圧搾液がなくてはならないものと思ひ込まれておりましたが、それを物理化学的に追いつめていって、結局培養には三つの要素が必要だ、という事を明かにしました。それは第一は塩類、糖、アミノ酸類、ビタミン等の所謂栄養分です。第二は血清蛋白でこのうちでもアルブミンの方が必要です。第三は生長活性物質で、これが古閑君によつて初めて発見された要素であります。これまで多くの研究者は、第一の要素の研究にだけ氣を取られ、何とか必要な成分を混ぜ合せ、所謂合成培地をつくり、それだけで培養出来る様にしたと、色々苦心してきました。しかしそれだけでは、培養が楽で、よく使われている繊維芽細胞の生長も一時的で、どうしても長く続けることが出来ないのです。ところが、表皮系の細胞例えば HeLa 細胞は、上にあげた第一、第二の要素だけで立派に培養が出来るのです。ここで古閑君の頭に閃いた考えは、細胞によつては、自分

で生長をおこす様に働きかける物質をつくる能力を持つてゐるものがある、という事です。つまり生長を促進する物質は細胞の中で造られ、それが細胞の外に出て、他の細胞の増殖を促し、またそれら細胞からもその物質が出来てふえていく。つまり生長活性物質というのは、丁度今もてはやされているバイラスと同じ様な性質を持つてゐるという事です。この物質は胎児の圧搾液の中に含まれてゐますから、これを造りえない繊維芽細胞の培養には是非必要だつたのです。そしてこれは又白血球に多く造られ、それが第三の要素として第一、第二の要素と一諸になると協同して繊維芽細胞の成長を促進するという事を見出したのです。後で氣が附いたのですが、白血球のそういう性質は、組織培養法の發明の親、カーレル博士が既に見出してゐた事を知つて、さすがにカーレルはえらかったと話合つた事でした。

とにかくこういう物質の存在を知つたのでその本体を探らうとして色々の試験をしたのですが、なにしろ非常に不安定な性質を持ったもので、氷室に取つておいても間もなく變つてしまふというもので、苦勞しました。が、リボ核蛋白であるという事までは分り

ました。この物質は熱に対して甚だ弱いのですが、白血球と一諸にして三八度におくと、その力が弱くなるどころか、生長活性物質がうんと殖える事が分りました。つまりこのものが白血球の中で殖やされた事が分ります。

そこでこの生長活性物質は、体の中で白血球以外にどういう組織に出来、どういうふうにおくかという問題にうつりました。それには細胞が殖えたという事を、簡単に正確に計れる組織を使うのが便利です。この意味で先づとりあげたのは、吉田肉腫であります。それは培養液の中で細胞が血球の様に浮いており、それ等が殖えたという事は、培養液を吸い取つて簡単に血球計算の様にして、数をかぞえて判断する事が出来るからです。そこで先づこの吉田肉腫の種をマウスの腹腔に注射します。勿論肉腫が生長し、そのまゝにしておくと、全身が肉腫に犯され死んでしまします。そこで、この肉腫細胞を取つて、前に挙げた第一、第二だけの培養成分に植えると、立派に培養を続ける事が出来るのを知りました。但し細胞の数（濃さ）がある数以下だと、肉腫細胞が殖えてこないが、ある数以上になると、増殖してきました。これから考えられる事は肉腫細胞は、細胞体内で生長活性

物質を造るが、それを外へ出して自分自身の増殖には使わない。外へ出た活性物質がある濃さ以上に殖えて増殖に役立つという事です。こうして立派に吉田肉腫を人工的に長く培養し続ける事が出来ました。この際、大綱や脳組織を加えてやると、一層増殖がよいという事が分かりました。これ等の実験は、大綱や脳組織が吉田肉腫細胞を殖やす第三の要素を造る能力を持っているという事を示すものです。驚くべき発見といえる事は、吉田肉腫の培養液から完全に（私共の遠心機で出来る範囲に）細胞を除いた液体分だけをマウスの腹腔に注入すると、完全に吉田肉腫が發生し、やがてその為に死ぬという事実。それからこの様な培養液をごく僅か繰返しマウスにやると、今度は吉田肉腫を殖えつても肉腫にかからなくなるといふ事実です。これ等の事実は、現代医学の最大の問題の一つである腫瘍の予防研究へのしつかりした足掛りをつくつたものと云える様です。

吉田肉腫に次いで取挙げた問題は、エールリヒの癌であります。これの純粋培養も、まだ他には成功してない研究でありますが、これも見事に成功しました。

あまりこの紹介も長くなるので、結果の筋

だけを申しあげますと、この癌の培養に、第一、第二要素と、この癌の培養の第三の要素を産み出す組織として、脳組織（これは最も有効、脳組織のエキスではため）、大綱、リンパ線、肝、脾臓、骨髓、肺の切片を加えてやります。同じ癌組織から、骨髓を加えてやつた場合と、大綱リンパセンを加えてやつた場合と、出来る細胞は違つた殖え方をするので、二つの種類の系統として、わけて培養を続けています。但しもう外の組織を加える必要なく第一第二要素だけで立派な生長を続けます。

以上生理学の立場から出發して、腫瘍方面には入ってしまった感じがありますが、こゝから生体内各器官組織の正常の發育という現象を逆に考えてみると、沢山の示唆にとむ問題を見出す事が出来る様です。前に挙げた脳組織は生体各組織の發育に対して、生長活性物質を造るという点で何か役割を持つていないかどうか。バイラスの増殖の基地としてよく脳が使われているが、これは今の研究と関係がないかどうか、そんな方面の研究分野も広くひらかれそうであります。

古閑君は、更に神経細胞の培養にも成功しかけているのですが、この方面の研究の前途

も計り知れないものがあると思われれます。

カーレル博士の組織培養法発明以来、培養学者が抱いて来た夢の一つ、体の色々な組織を器の中に育て、その働を眼でじかにみつめながら研究するという事、それは満更夢ではなくなつた様な気がします。

私は過去を語る事を好まず、いつも先の方ばかりみつめる事を生活信条としてきたのですが、この同窓会報に、私の現役最後のおめみえとして、この紹介をする事は、私の義務でもあり、又喜びでもありますので、タイプを叩いた次第であります。(原文ローマ字) 一九五七、一〇、二一(本学教授・生理学)

八幡支部から寄附

同窓会八幡支部長山隈慎一氏から、同支部の拠金壹万円也を十一月八日、尾崎会長宛同窓会に寄附せられました。八幡支部会員の皆様に厚く御礼を申し上げます。

八代支部から寄附

同窓会八代支部では、同地での会員合議の上宴会費節約による残金として、今年三月九日二、九一五円、六月十九日三、六二〇円を母校医学部の学術研究費補助として医学部長宛寄附せられました。

再び同窓会会館建設に就て

尾 崎 徹

熊本大學醫學部同窓會が結成されてから一年を経過した。一年という時日はさ程長いものではないが人間が生れてから一年経てば這つたり、蹣つたりする。歩く赤ん坊も稀れではない。

同窓會も寝てばかりでは發育しない。最早や歩く稽古をせなくてはならん。昨年仙台の東北大學で日本結核病學會が開かれた。私の友人は出席して醫學部の同窓會館のすばらしさに驚いて『東北人の團結の強さと同窓會の社會的活動の盛んなこと』を語つた。

私は東北大學のその様に一舉に成人せよと云うのではないが少くとも同窓會と云う現實の形を母校の一角に成長させたいと思う。

人間は生れてから一人で成長するものではない。同窓會も亦幹部だけの努力では發展しない。全會員の絶えない應援と支持とが必要である。長崎大學醫學部では同窓會館建設資金二千數百萬を集めたそうだ。

然るに熊本大學では未だそのプランさえも立つて居ない。會員の中には、或は同窓會館は無くとも會員相互の連絡と融和が取ればよいではないかと考える者もあるかもしれない。而し現代社會では單に懇親和合のみが同窓會の使命ではない。

會員が各地で會員相互の連鎖活動によつて社會福祉に寄与することが大きな眼目であり是に伴つて更に融和統一組織に移行することが同窓會の發展である。而して會の社會的な發育成長は母校の飛躍的建設に役立つものである。

母校も今年本庄町の舊地に鐵筋コンクリートの近代的な校舎が建設される。此の機に同窓會館建設の企てを樹てなければならぬと思う。

明年は熊本で日本泌尿器科學會、腦外科科學會、衛生學會等が開催される予定である。多分會員が多數集まれるであらう。幹部は舊交を新にするため會員諸氏に諮られては如何。(大六卒・熊本市醫師會長)

私 と 酒

辰 弘 星 勝

私は今高血圧のため入院治療を余儀なくされています。こう申しますと諸君の中にはきつと「先生は酒は飲み過ぎなはつたとだろ」といわれる方が少なくないと思います。そのような声なき声が私には聞えるような気がします。飲酒と高血圧との間に果してそれほど密接な因果関係があるかどうかは別として、とにかく私は一般に非常な酒飲みだと思われていることは事実のようです。いつたつたか胸成をやつた患者の家族が訪ねて来て「今日は先生の大好きなものを持つて参りました」と言つて大いばりで一升びんをさし出された時は、私はそれほど呑んべえと思われているのかと自分ながら些かうんざりしました。なるほど宴会などで人に盃をさされた時は相当に飲みます。従つて決して嫌いとは申しません。しかしこれは自ら好んで飲むというよりはむしろ飲まされる方でありま

す。が酒に強いのは決して稽古をつんだ結果ではなくて生れつきなのです。私の祖父も父も全然酒が飲めませんでしたので私の育つた家には殆んど酒の気がありませんでした。そんな次第で私も中学を卒業するまでは正月の屠蘇酒以外は一滴の酒も口にすることはありませんでした。五高に入つてから東京庵（そば屋—今の桜井荘）でクラス会があつた時、初めて酒というものを飲んだのですが、友達が多くが酔いつぶれたのに私はなんともありません。この時初めて自分が酒に強いということを発見したのです。私は男の兄弟が六人ありましたがそのうち五人までは親に似ず相当以上

に飲んだ方です。曾祖父が地方で名うての酒豪だつたそうですからその隔世遺伝とでも申しましようか。

私の酒は前にも言つたように好きで好きで飲むというのではなく、宴席などでさしつ、さされつしているうちについて深酒をするという型であつて、私は自らデレーゲンハイツポタートル（機会的飲酒家）と称しているほどです。家では来客の相手でもする時以外は晩酌などしないのですが（恐妻のためではありません）そういつても誰もなかなか本当にはしてくれません。

中国では大酒飲みのことを海量ハイルヤンといいます。恐らく海をも呑みほすという意味でしょうが、さすがは文字の国だけあつて形容の大げさなことも斗酒なお辞せずなどの比ではありません。私も北京大学在職中は中国側の友人から海量とおだてられたものです。若くもあつたし、異国人と飲むので気が張つていて一度も酔いつぶれたことがなかつた関係でしよう。

要するに私は一種の酒豪であつたことは事実ですが、酒なしでは一日も過せない『酒の虫』とでもいふべき質の酒呑みではないのです。従つて高血圧のために禁酒を命ぜられてもそれ程痛痒を感じないつもりです。とは申しまして今後一生一滴の酒も飲んでほらないということになればやはり一抹の寂しさを禁じ得ないこともまた事実です。

三二・一一・二〇

（本学教授・外科学）



随 想

犬 塚 厚 生

私が熊本医専を卒業したのが大正十二年だから今年で丁度卅四年になる。この間の世の中の変化と言うものを振りかえつて見ると大変なもので恐しい位である。熊本医専もそれより一年前に県立医科大学に昇格し其後国立医科大学となり終戦後現在の熊本医学部に発展した。これだけでも一つの立派な歴史である。

私が熊本医大で研究しておつた昭和六年乃至昭和十年頃から世界の一大変化のきざしが見えておつた。即ち日本では満洲事変、五、一五事件、二、二六事件等日本政府は根底からグラ／＼し出し軍部独裁政治と相成り、私が学位をとつて二ヶ年後の昭和十二年七月七日には支那事変が起つた。私は直ちに召集され支那へ渡つた。昭和十六年十二月八日には大東亜戦争に突入した。そして私も再び召集され南方へ出征した。戦は吾々に不利で敗戦又敗戦となり遂に広島、長崎に原爆が落下して終戦となり、世界に再び平和がよみがえつて来た。そして其の結果世界に幾つかの新しい

独立国家が生れ更に引続き生れんとしておる。日本は満洲、朝鮮、台湾、樺太を失ひ千島さへも失わんとしておる。吾々が南京の西南、寧国附近におつた昭和十二年十一月末頃独乙大使オットーの仲介で蔣介石氏は一、満洲（東北）の独立を承認する。二、日本軍は北支、中支から全面的に撤兵せよ。と言う条件を出したが日本政府はこれをけつたと言う専らの噂であつた。当時の日本政府に眞の智者がおつたなら日本歴史も今日とわ大変違つておつたであらうと思はれる。

日本歴史の変化も著しいが何といつても原子科学の発展程大きなものはない。第二次世界産業革命は必至である。今医科大学に学んでおられる若い人々の一生は一大変化があつた吾々年代の者の一生よりも驚くべき想像に絶する波瀾に富んだ一生と相成るであらう。

世界の第三次大戦は原子科学のかぎりなき発展のために遂に取り止めにせざるを得なくなるでしよう。世界産業の著しい発展と共に世界の文化、交通の発展も亦驚くべきものであるでしよう。そうして世界は益々縮小されよう。

現在世界は民族自決時代ですがやがて集團国家、連邦国家時代に変つて行くでしよう。

歐洲連邦は皆さんの生存中に実現するでしよう。

世界が狭く交通が頻ぱんになるにつけ世界共通語が出来るでしよう。そしてそれは多分英語になるでしよう。

日本の新聞等も何時迄も縦書を頑守することとは不可能となり勢ひ横書と相成り、而も現在の漢字のように英字をスペル其のまゝ記入するように次第に相成るでしよう。従つて日本に於ける英語教育は小学校時代から採り入れられるように相成るでしよう。

實際近頃次第に吾々大阪臨床外科医界に於ても世界見物に出掛ける人が多くなつて来ました。旅費がもつと安くなつたら益々多くなることでしょう。今の若い学生は皆欧米へ一度は行つて来なければ田舎者になるでしよう、病院経営の方法も欧米流に變つて行くでしよう、即ち各病院共に研究部を持ち特色を持たねばやつて行けなくなるでしよう。バ氏病専門とか癌腫専門とか心臓外科専門とか脳外科専門とか接骨専門とか痔専門とか、従つて現在の医療法の専門科目も勢ひ変らざるを得ないでしよう。又吾々医師の活躍範圍も漸次拡大され近き将来に東南アジアに進出するように相成るでしよう。吾が熊本大学の学生

諸君も学者として又実際家（診療従事医師並びに疾病予防医師等）として世界的に益々雄飛発展せられるようお祈りして止みません。

（大十二卒・大阪市）

雑感

福田 武夫

(一) 昔の学生は幸福であつたと思う。唯学業に専念する丈でよかつた。小生等どうも専心した覚えがないが兎に角勉強したあと自由に学生気分を満喫出来た。親の脛を噛れる丈噛つて貰つた免状も子を持つ今となつては懐かしい思い出の一つである。今の学生諸君には勉学ありアルバイトあり、仲々自由な殊に学生気分を楽しむ時間を持ち合せない人が多い。敗戦後は全ての事情が混乱したとは云い乍ら…就職の為めの学歴…是が非でもこの学校を…こんな事からもその因を求める事が出来るのではないだろうか、学生らしさの少いのが気の毒だ、世間も学生だからとは云つてくれなくなつてゐる。

(二) 一体大学の教授ともあれば学識、人格経済的にも最も優れた御方であり吾々の遠く及ばざるものとして畏敬したものだ。会う度

毎に敬礼を以てし「三尺下つて師の影を踏まず」式の…今の学生諸君から「何だ自覚のない奴」と怒鳴られ相だが実際吾々はそんな風に考へてゐた。電車の中で会えばお辞儀をして「さあどうぞ」と席を譲り神妙な面構えで「ハアハア」の連続であり、宴会で談笑した教授とは似ても似つかぬ変態でゴチゴチした雰囲気を出す。然しガンガン叱り飛ばされた事など今も懐かしくもあり未だに畏敬の念には変りがない。

今の学生諸君は物事を非常に割切つた考え方でゐる様だ。教室での師弟関係も一歩外に出れば一個の人間として対等関係に移行する。

まして利害の相反する場合等殊にその感が深いと思うが小生一人の見方であらうか、之は独り学生諸君に限つた事ではない。現在の労使関係は全てそうである。要するにお互に屈つぽくなり過ぎてゐるのではないだろうか。

(三) 親は娘を重んじて大人の意見を子に押しつけたがる、子は子で自分の意の正しさを主張して譲らない。凡て主観の相違によつて来るところ、親曰く…今の子の考え方は解らない…子曰く…親の旧思想の押しつけは真ッ平だ…。小生至つて旧思想な精でか親の恩

を大いに肝に銘じていた心算であつたが、ざりとて親孝行であつたとも云い得ない。

男女一度成人式を挙げると一個の人間として法律的に権利義務を生じて来る。親の反対があろうとそんな事は形式上では何等意に介する必要がない…とても云うなら親とて多分に云い分があるに違いない。自由主義結構、然し義務責任の伴はない様では戴きかねる。道徳教育も必要ですかね。

(四) 技術がよくて能率も良い者は世間も之を認めて優遇するでしょう。反対の場合なら切り捨てたい。而し之が出来ない世の中にならんとも限らない。一定期間を過ぎると同じ様に昇給する。ある枠内ジツトしてゐるれば食える云うならそこに何等向上発展を望めない。人の待遇は能率給を無視したものであつてはならないと思う。

(五) スト、スト、スト…明けても暮れてもスト…一体あんなにストやつてゐる連中は一年中職場の仕事が出来るのか知らう？

企業家が要らぬと云つて餓にしようとしても見給え、又ストだ。同情スト…何をか云わんや…ストによる損害は一体誰が補償してくれるのやら。

（昭十二卒・人吉市）

自己紹介

大友 端 立

私は本学卒業生でもなく、又医師でも医学者でもありませんので、先づ自己紹介をさせていただきます。

私が熊本大学医学部に奉職いたしましたのは昭和二十八年九月でありました。縁生縁滅といつて、世の中のこと一切は、縁によつて生じ、縁によつて滅すると申されてをります。私がこちらに参ることになりましたのも中々に浅からぬ縁かと思つてをります。

私の郷里は福岡県直方市ですが、父の出生地は、人吉から球磨川を三里ばかりさか上つた深田村です。五高を卒業しましたのが、昭和二年です、そうした関係から、熊本には、その山河にも、人にも一入なじみの深いものがあります。

医学部に勤めるようになって更に又学部内や、同窓生の方々と色々の面で、意外に親しい間柄にあることが分つて、大変に心丈夫に思つてをります。ほんの一例であります。私の出身中学は、福岡県嘉穂中学で、現熊本市民病院長林田満夫氏は同中学の一年先輩、

菊池で開業の大里吉足氏は同期生、医学部小児科助教授貴田丈夫氏や同窓会理事の松熊勝氏よりは、私の方が三、四年先輩に当ります。

昭和五年京都大学法学部を卒業して、新聞記者を志望した私は、当時五高の校長であつた溝淵進馬先生から、報知新聞社長野間清治氏に推薦していただいたのですが、野間さんが講談社々長でもあつたので、そちらの方に廻され、爾来編集局生活八年、昭和十三年秋野間社長父子相ついで世を去り、たゞく感ずるところあつた私は、翌年退社、日本水産に転じ、満洲国勤務となり、新京在勤中終戦を迎え、生命はいくらあつても足らないような危い目に幾度か会いながら、きわどいところで、その都度助かつて、大連経由、昭和二十二年三月引揚帰国したものであります。

私は職務柄、日常直接学生に接する立場にはありませんが、私の只一つの道楽とも云うべき剣道を通じて、元氣のよい学生達と、親しい然も素裸の交りをつづけることの出来まゝすのを非常な喜びとしてをります。私が赴任しましてすぐ、医学部に剣道部が生まれ、部員も年々増加し、目下盛んに稽古に励んでをります。終戦前後を通じて、約七、八年間剣道

の出来なかつた空白時代がありましたため、学生の大部分が、大学に入学してはじめて竹刀を握るといつた状態ですが、学生達は修練を通じて、精神的にも大いに得るところがあつたと喜び、卒業までには大抵二段位とつてをります。熊本医科大学当時の剣道部黄金時代の再現を期して、一同精進いたしてをります。特に剣道部の先輩であられた同窓生各位には非常な御援助と御激励をいただいてをりますことを、私からもこの機会に厚く御礼申上げますと共に、今後ともよろしく御指導御依頼をお願い致します。

熊本に住みついて四年の歳月は流るゝように過ぎ去りました。私が参りました年に入学した学生は、早や本年三月卒業しました様な次第で、次々と若人達がたくましく伸びゆく姿を年々眺めては、深い感慨にひたりつゝ学生諸士の輝く前途に幸あれかしと祈りながら学園生活を送つております。

学校事務は至つて地味でこの四年間さして変り栄えのするお便りも見出すことが出来ませんが、昭和三十年に熊本大学大学院医学研究科が設置されたことと、戦後焼野原のまま放置されてあつた本庄町の敷地跡に鉄筋四階建の堂々たる基礎医学教室の建築が着工

されたことは特筆してもよいと思います。

産業道路をはさんで附属病院の新装なつた外来診療所と向い合つて、目下建築中の医学の殿堂は、すでに周辺の偉観として従来の環境様相を一変させております。坪数その他建築に關してのことは、すでに前号で報告いたしましたので省略しますが、本年八月二十四日に起工式を挙げ、本年度中に八八〇坪が竣工することになっております。全体計画完成の暁はさぞかし見事な景観を呈することだろうと、大いに楽しみにいたしております。同窓生各位におかれましても、何卒御期待いただきますと共に、御激励と御後援をお願いいたします。

終りに同窓会のいやます発展と、会員各位の御健康を心からお祈りいたします。

(熊本大学医学部事務長)

同窓ひろい嘶

岡村 一郎

Yさんの机の上の乱雑さはお話にならない。本人に云わすれば『師匠ゆずり』だそうだが大した出藍ものだ。その机の上に焼瓦の破片がある。九曜の紋所が付いて居る所からして

熊本城の何所からか拾つて来たものに違いない。然し彼は得意気に超国宝物と放言して居る。その訳を『熊本城は国宝であり此瓦は焼瓦である。熊本城が焼けたのは今度の戦争ではなくて明治十年の西南役である。この瓦は本丸の跡から拾つたが低い所にあつた焼瓦をわざわざ高い本丸跡迄持ち運ぶ訳はないからこの瓦がかつて熊本城の天守の屋根高く輝いて居た事は間違いない。西南の役に焼けて春秋秋雨八十年、なおその昔より移り行く熊本城の歴史、否日本の歴史を見守つて来た栄光の焼瓦、これこそ超国宝と云わずして何でや』と。

☆ ☆

瓦の話は今一つ。TさんはYさんと負けず劣らずの下手物趣味である。Yさんの九曜の紋の向を張つてかそれ以上の物をせしめたいと念願した。九曜の上は蛇の目である。熊本城築城の主加藤公の蛇の目、桃山の栄華と太閤の夢を宿す蛇の目の瓦、幸い医学部は熊本城二ノ丸跡にある処からTさんに此幸運が来ないとは断言出来ない。登校下校の折は勿論中食後の少時、午後の気晴の折、Tさんの青い鳥を探す姿が城内のあちこえに見られた。なかなか見出されぬ幸運の鳥のかわりにTさ

んの熊本城に関する博学は積み重ねられて行つた。城内に古井戸が百幾つあるとか、この小路は昔の北の裏門であつたとか、ここは〇〇公の二号さんの宅跡とか。もし誰かTさんの室を訪ずれば熊本城の古図の軸がかゝつてゐるのに気付かれる。これはTさんの自筆になるものである。さてTさんは城内から古城堀端に通ずる法華坂の草むらで遂に一枚の見事な蛇の目を見出した。やがてこの瓦の片は奥さんの真心のこもつた絹の小布団の上にせられてTさんの部屋を飾る様になり、Yさん始め訪客は長々とTさんの自慢話を聞かされる事に成つた。或日Tさんの若い助手君が『先生この瓦は何ですか、お城の中(二の丸跡、医学部の意)には沢山落ちて居るし、その便所の瓦にも全部この標が付いて居ます』とTさんの青い鳥は昔も無く飛び去つた。若い人よ老人の夢を破らずに。

☆ ☆

Mさん、これは基礎医学の学究である。終戦後の暫時を田舎に暮して居た。何とかして食いつないで生命を維持して行かねばならぬ。医者であつて医者でない彼は始めて医師免状の有難さを知つた。幸い無医村である。彼は勤務から帰るとブラリと近所の百姓家に

遊びに行く『婆さん元氣かね。顔色が悪いわい。風でも引いたのだらう。薬をやらう。上等の薬を、心配する事はない。ナニ薬代なんか』此の調子で医者押売をやつた。翌日かその翌日婆さんは五合ぐらゐの米を提げておれに來た。Mさんがアスピリンと重曹を持つて居たのは事実である。

☆ ☆

Kさんも基礎医学者であり終戦後田舎住いをやつて居た。或日突然原因不明の排尿困難を來した十三才ぐらゐの娘の処置を頼まれた。ネラトシカテールで導尿すれば一時的に何とかなるぐらゐは知つて居るKさんである。隣町のお医者様をお願いして借り出したネラトシで導尿を始めた。入れても入れても尿は一滴も出ない。カテールは殆ど姿を没してしまつたがまだ出ない。患者は苦しむし患者の両親はますます心配顔を深くする。Kさんの額には玉の様な汗が出るが事實は事實で如何とも為様がない。ハタとKさんは考へた。穴違いではなからうか。何分相手は十三娘。こゝであつては損である。患者の両親の手前やはり名医振りは示さねばならぬ。おもむろに彼は云つた。『このゴム管はつまつて居る』引き出す時によく見るとやは

りのHeideに入れて居る。抜いたカテールの端を口に当てブツと吹いて今度は良く見定めて排尿の目的を達したKさんの喜びは患者や両親のそれをずつと上廻つて居た。

☆ ☆

Sさんは自分の専攻して居る顎口虫を我身に寄生させて困つて居る。唇に出たかと思へば頻に出る。舌に出たり、喉頭部に出て窒息しかけたり、口腔を中心に暴れ廻る虫に永い間苦勞したが最近ようやく胸部以下に移行した様で一安心して居る。と云うのは或夜突然彼の左乳房が妙令の処女のオッパイの様に大きくなり、又翌朝はきれいに元通りに返つた。彼の顎口虫症の特徴は腫脹の発現消失が非常にスピーディーなことである。乳房腫の翌々日は突然左側腹部に神経痛様発作がおこり臥ても起きてもおれぬ一日を過した。とにかく下に下にと虫は旅をつゞけて居り、窒息を起す様な危険な発作からは遠ざかりつゝあるので彼は苦しいノイローゼから解放され、その嬉しさのあまり早速仲間のRさんやAさんに報告した。Aさん曰く『君今少しさがつてBeischafの最中Pensが腫大したらどうなるかね』Sさんの變つたノイローゼが又始まつた。

☆ ☆

Gさんは最近メキメキ肥へ出した。二十四貫か二十六貫かになつたそう。更年期障碍の発現かもしれない。友人のNさんが『えらい肥えたもんだね』と尋ねたのは肥え過ぎを氣にしたからだ。Gさん答えて曰く『エー良く肥えたもんだと我ながら驚くよ。だがね君。これだけ肥えても肥えぬ所が一ヶ所あるのを家内が発見してねアハハ……。道理でGさん一家は相変らず春風胎湯である。

☆ ☆

筆者を廻る友人同窓の實話であるが氣安に書いて特にお叱りもない様だ。同窓の良さがある。Yさん、Mさんその他の皆さん許されよ。(昭十二年・本学教授・寄生虫病学)

医学部事務長大友端立氏は十二月六日付鹿兒島大学庶務課長に転任された

教室だより



第一解剖学教室

◇ 明年三月には佐々木教授が停年退職となられるのでこの機会に一度教室の歩みをふり返つて見たい。

◇ 現在、当教室で最も誇として居る所は、この教室に学んだ人が非常に多いという事であり、その中には現役の解剖学専門家として、本学第二解剖の忽那教授を始め浄住助教授、鹿児島大学の大森教授、佐藤教授、九州歯大の中山教授、東京歯科大学の上条教授等六人の先輩が有ります。これは本学に於いては勿論、又解剖学会に於いても、かくの如く、多数の専門家を出身している教室は類のない事であり、ます。

◇ 又直接、本教室に学んで学位を受けられた方の数は現在の第一解剖と第二解剖が分れた後だけでも四十四人に上つて居り、この他に前述諸先輩の指導によるものも亦多数に在ります。

◇ 現在では研究生は二十三名、臨牀の余暇をさいて、も一度解剖をして見たいと謂う人が年々増えている様です。

◇ 従来解剖と言えは人体その他のいろんな標本と実習とが先ず連想されますが、この方も戦災以来徐々に形を整え、現在では骨格標本も学生一人に一体、又、死体実習も昨年当りから二人に一体と略々戦前の水準に近くなり、臨牀医局の方や一般臨牀の方々にも多少共研究の便宜をはかれる様になつて来ました。

第二解剖学教室

官制上従来の解剖学教室が第一及び第二の解剖学教室に分離独立したのは昭和二十三年度である。明けて二十四年五月忽那教授が第二解剖学教室の主任教授として久留米医科大学よりおいでになり、同年六月五日開講され、以来八年有余戦災大学の施設教室であり、当時忽那教授始め教室員の方々は少い教室経

費を以て研究と同時に教室設営と云う難事を抱えられ、その苦勞は筆舌につくし難いものがあつたようであるが、往時の第二解剖学教室を知る者は比較的短時日にととのつた現在の教室の様子を見て先ず驚かれる。教授、助教ははじめ教室先輩の涙ぐましい努力の結果今日では研究に支障のない多くの器械、器具竝に図書が備わり、一方教室の研究器械、器具及び図書が次第に揃うと共に研究方面の成果も挙り、忽那教授の御指導のもとリンパ管系統の比較竝に人種解剖、脈管外通液路系の組織学的乃至実験的研究は広く内外の認める所であり、又日本人の出自の問題に関連する九州、四国住民の人類学的研究、更に皮膚隆線系よりする東亜人種の人種性解明など着々と多くの成果を挙げ、欧米各大学からも資料交換の申込があつてゐる。

尙又日本人の人種論を説く上に必要不可欠の古人骨の資料も漸次蒐集され、縄文、弥生、古墳、有史時代と各期の人骨が既に四十体以上を数え、この方面の研究にも着手してゐる。

現在の教室は忽那教授を中心に徳留助教以下助手三、研究員四、研究科学生三、選修生六と常勤者十九名の多きを数え、それに研

究生三十五名が忽那教授の「研究に休みはない。」とのモットーのもとに日夜研鑽に努めている。忽那教授自身夜半十二時過ぎまで教授室に頭張られる事は度々である。

(松野助手記)

第一生理学教室

都塵を離れた熊本城内の教室で、小玉先生御指導の下に教室員一同研究にいそしんでいます。

小玉先生は、来年教室の前に桜が咲く頃御停年となられるので御在職の期間も残りわずかとなりました。

かえりみずと昭和三年一月、海外二ヶ年の研鑽をおえられ御帰朝後まもない頃先生は生命の根本問題の追求と云う理想と抱負とをお持ちになり、本教室の教授となられて以来三十年、ワールブルグの組織呼吸の方法及びフイッシャーの所で学ばれた組織培養によつてこの問題の解明に研究を進められました。

白川改修によるお家の移転の問題等公私共ににお忙しいにもかゝらず、今日心臓灌流実験に自ら実験をなされておられます。

教室員も現在三名になりましたが、小玉先生のたゆまない御努力を手本とし教室有終の

美を飾るべく熱心に研究を続けています。

次に教室員のやつている研究の概要を述べますと、緒方正雄先生は長年の間小玉先生の良き文字通りの助手として元気にやつておられます。古閑睦好講師は専ら組織培養を担当し最近はお癌の問題に触手を出しています。残務整理の責に耐えるかと心配しています。又胃の塩酸分泌の問題に北原伶助手が取りくんでいます。先頃までおられた古賀秀雄先生は再春荘に就職されましたが、なほ研究生として教室に来ています。

研究生の諸先生方は大体実験も終えられ論文整理にお忙しい様です。

森永泰彦先生は性ホルモンの睪丸子宮にたいする作用を、平山静雄先生は心臓と脾臓との間の代謝の関係を組織呼吸の上からみておられます。山戸朝郎先生は骨髄の又、坂梨隆一先生は虹彩の組織呼吸をやつています。若江百恵先生は抗生物質の虹彩上皮に及ぼす影響の培養実験をやられました。補助員の松岡松本両嬢に実験雑務等をやつてもらつておりますが毎日忙しさに追われておる次第です。

☆××☆

第二生理学教室

生命現象の一指標と考えられる生体内の神経、筋系統に見られる電気現象は古くから知られて居りましたが、第二次大戦中レーダーの製作に附随して急速に発達した電子管工学と、単一細胞内刺入を可能とする微小毛細管電極がこの分野に導入されるに及んで生体内電気現象の解明はこゝ十数年来目ざましい進歩を示し、臨床方面にも盛んに応用される様になりました。

電気生理学のこの様な発展に因えて、本教室は昭和二十八年第二講座として発足し、当時英国留学中であつた佐藤昌康教授の御帰朝と共に翌二十九年十月よりその活動を開始致しました、と云つても実は開設当初は二名の助手とガラシとした部屋だけしかなかったのですが、あれこれ遣り繰りしてどうにか胎生期の悩みも切り抜け現在着々と研究の成果を挙げつゝあります。

私達の仕事の内容を御紹介しますと、目下味覚受容器とその求心性衝撃に関する研究を分担して行つています。蛙の舌をその知覚神経と共に摘出し、異なる味溶液を与えた場合、味蕾の中の直径約十ミクロン位の味細胞に

如何なる電氣的變化が起り且これが知覚神経にどの様な形式の求心性衝撃を誘起するかという事を調べ、このことから未だ殆ど知られていない味覚受容器と知覚神経末端との結合状態がどの様になっているか、更に異種の味覚の識別は如何なる形でなされているのか、と云う根本問題にまで遡らんという興味あり且困難なテーマと取組んでいます。尙、この様な研究を進めるに当つては物理化学、生物学、電子工学等に関する広い知識を必要としますが、そのすべてを各人が身につけることは容易でないという考えから三名の助手の中二名は夫々物理学、生物学を専攻した人によつて占められています。

教室員はこの外補助員、小使各一名で計六名の小所帯ですが、皆スポーツが好きで休憩時間にはピンポンに凝り野球に凝っています。但し御自身の神経組織はあまりよくないと見えて、仲々上達しそうもなく、他流試合はまだ連戦連敗の有様ですからきつと笑話の種になっていることでしょう。

(十一月二十六日 石河助手記)

生 化 学 教 室

私共の教室は、牧野教授御転出のあと、内田教授を迎え新しい設営にかゝつてから凡そ二年になります。米国留学から帰朝早々御赴任になった教授には、熊本の氣候はいさゝか不調和の御様子でしたが、その後段々順調に順応されて、昨冬は雪さえあれば毎日曜日でも阿蘇の草千里へスキーに出掛けようとなされる程でした。

研究については教室の設備充実に問題を猶将来に俟たねばなりません、精力的な内田教授の鋭い斬新なアイデア、サゼクションの下に、若い者はかり四人、それに補助員一人計六人世帯で実験を推進して居ます。殊に毎年大学院学生の入学は、教授の研究者中心の物の考え方と、教授も研究仲間の一員として先輩としてディスカッションし常に手をとつて御指導されることと相俟つて教室に一段の精気を齎らして居ます。実験者の活動し易い場、雰囲気は、果しない大きな研究テーマと取り組んでも悠々と実験を進めることが出来て、先に行われた国際酵素化学シンポジウムではその結果を国際仲間と激しく討論し合つたことでした。

二十世紀前半が例の原子爆弾を頂点として核物理化学の進歩を示しましたが、一方前半の中頃からすさまじい発展をした生化学分野は、今度の国際酵素化学シンポジウム或は近年のノーベル賞授賞に見られる通りです。

生化学に有機化学・物理化学・量子化学が導入されて見事な成果を挙げている今日では、医療に附随した所謂医化学的な生化学のみでは到底存立し得ないことは、例えば十年前の教育を受けられた方のビタミンについての概念を描いてみても分る通りです。私共が病気を理解し治療する立場も、その生理を把握してこそ充分適切な加療を行えるのであつて、底知れない生化学の進歩と共にその理解も益々深まつて行くものであります。私共の教室では主として蛋白質・アミノ酸の中間代謝到有核アミノ酸についての仕事をしています。代謝系の解明、中間代謝酵素の精製分離結晶化は申すに及ばず、疾病酵素の繰で把握する方向例は白子、痴呆、或は腫瘍、ビールス疾患等に就ての関係等の如く、その進展分野は極めて多岐に亘つて期待せられるところであり、御承知の通り、蛋白質は生命の担体とされる酵素の主要構成成分であり、生命現象或は又その一部分である疾病現象を扱

う上にも、今後それについての一層の理解が必要でありましょう。二十世紀後半が酵素化学の一大飛躍を劃して人工生命を作り上げる時には、疾病殊に今日不可解な腫瘍、ビールス性疾患、精神病についても解決出来る事柄が多いことでしょう。医学の研究に當つて、生化学的の取扱いをする事は非常に屢々で又これを措し置いては不可能な事象も沢山あります。現在も将来も、臨床・基礎を問はず医学の研究に際しては方法論的にながつちりした基盤の上に立つて物を考え実証する訓練或は勉強が絶対に必要であり、殊に生化学的な基礎をもつて物を見る立場は非常に優力なものでなければなりません。今日医学教育の体系が、動々もすると医療技術本位に組み変えられ、真に學問的研究が低調となるのではないかと見られる風潮があることは遺憾であります。同窓の先輩或は在学生、或は後に続く若い世代の人々の理解と奮起とをお願いし度い次第です。そして母校の盛暢隆昌を見守りたいものです。

(浦中記)

第一薬理学教室

当教室現在の体系が作られましたのは二十七年前昭和五年十二月尾崎教授の着任後でこ

ざいます。その後、多くの人々の努力を経て現在の教室員に至つて居ります。毎年十二月十九日を教室の誕生日として同門の者が集り尾崎教授を囲んで記念の会を催して参りました。

その席では一ケ年の教室の歩みや今日の研究成果、昔の苦心談の数々等を交々盃を交し乍ら楽しいひとときを過しております。廿年前から続けております動物供養は年中行事の大切なものとして行つておりますが、お寺は春日町の長谷寺です。住職の大森師は今年九十を迎えられ天台の行者の御立派な風格のお方です。観世音經の誦經の中に実験動物万靈の会向をいたしております。教室では研究上の信条として実験方法の進歩が新分野開拓の第一歩とゆう様なわけで近頃、動物用の人工呼吸機を完成しこれを用いての研究を行つて居ります。昔考案作製された血圧調制装置も同じ意図で作られたもので私共はこれも盛んに駆使しております。

現在行われている主な研究題目は 1、血圧下降薬 2、人工呼吸の基礎的実験 3、血圧と腸管運動 4、感光色素の処理 5、ホソバヒイラギナンテンのアルカロイドその他治癒薬、香料の薬理などでございます。以

上の様な研究を少数精銳主義、時と費用を惜しまぬ主義で尾崎教授の下で、講師田島昭生助手川本久、西村敏男、藤本信也、研究生、和田勝敏、佐竹義経、植木寛、研究員永田吉徳、専修生緒方民夫、技術員二名、用務員一名が頑張つております。 講師 田島記

第二薬理学教室

昼となく夜となく water bath の傍にあられる瀬辺先生を中心に薬化学或は薬理学の実験に二十名が熱心に努力しつゝ、こゝに教室誕生以来八年を経ました。その間抄説会は百九十六回、発表論文も四十数報と云う数に及びましたが、尙七員環の化学的性質、アミノ酸の光学異性の事、インドール化合物の合成と薬理、草根木皮の有効成分の抽出又最近水俣奇病に関係して魚介類毒物の各種溶媒に対する溶解度の判定或は抗結核剤の合成と共に臨床教室と連絡をとつての実験等、この教室は基礎の中のそのまた基礎教室の様な性格があると思つております。薬理学が生理系の一学科として独立したのに対して、この第二講座は一面生化学的な方向から薬理学を追求して行つて見たらとの夢を画いて日々実験にとり組んではいますが、學問の道は更に深くな

か／＼思うように能率が上がらない始末です。

医学の研究に化学的知識や技術が大いに必要となつて来て居る事は、研究に携つて居る人々の口を揃えて云われるところですが、一方ではなか／＼とりつき難い所もあつて、特に所謂医者を目指す方々にはとかく敬遠勝ちの様です。しかし一步中に入つて見ると興味も湧き、また何かしら自分のために残されている仕事がある様に思えます。この教室の一先輩である奥菌兄も臨床の傍ら曾ての実験を継続しておられるそうで、そのうちに見方の変つた面白い一大結果を出されるのであらうと教室員一同もその報告を楽しみにして居ります。目下論文執筆中の者が五名おります。私共は花も嵐も氣にとめず、slowly but steadily をモットーに研究を進めて行く度いと考へております。

尾崎記

病理学教室

終戦直前の空襲により灰塵に帰したわが病理学教室は一時停筆を続けていたが、昭和二十三年九月久保久雄教授の着任以来漸次復興の一途を辿り、昭和二十五年五月武内忠男助教授の着任と相俟つて昔に勝る姿となつ

た。昭和三十〇年八月、待望の第二病理学教室が新設され、武内教授をお迎えして現在では両教授の下に助教一、講師一、助手六、研究員八、研究科学生一、大学院学生一、選修生二、研究生四六が夫々研究に励んでいる。

臨床各位の御協力を得て年間解剖体数は二〇〇に垂んとし、全国四〇有余の医科系大学の中でベスト一〇の中に悠々入り、その質に於ても熊本は恵まれていて日本国中何処に出しても引をとらないものである。特に官公立病院以外に開業諸家よりの剖検例が非常に多いことは他大学にその比を見ず特徴的なことであらう。研究は主として Virchow 以来の流れをくむ一般人体病理学と近代実験病理学の最先端をゆく細胞並に組織化学の二大方面に向けられ、何れの方面に於ても素晴らしい業績を挙げ、学会に寄与するところ多大なものがある。昨年末の忘年会で久保教授が「私当病理学教室に着任した時は教室は人影も稀で、只鳩が我がものの顔に棲んで居たものであつた。本年からストウヴが入る様になつた。諸君、運動場に立つて病理学教室を見給え、十本に垂んとする煙突が林立して一大偉観を為しているのをノー」と申されたのは、吾々に極めて印象的であつた。

二つの病理に分れはしたが、第一、第二病理共和氣霽々、渾然一体となつて居るのは熊本大学に例をみないと思ふ。終戦以来の念願であつた建物も今年度より元の本荘町に鉄筋四階建の建築が始まり、来夏には移転することになつて居る。

解剖に、Probe にその他何事にもよらず病理学教室に用件のある方は、気軽に電話なりお出でなり、して戴き度いと思つて居ます。

(三十二・十一月二十六日 助手神原記)

微生物学教室

戦時中の印刷統制、用紙制限という鉄棒の中にはめられて、教室便りという様な企劃の記事を身辺に見なくなつてから、一寸思い出せない程遠い年月が流れている様な気がする。元来医学部の卒業生には同窓、同級という他に、同門という懐しい繋りがある。専門雑誌の固い論文には未だなじめなかつた学生の頃、「何々教室より」等という記事を読んで研究の動向を知つたり、又今を時めく方々の若い時分の記事等が出て居る昔の雑誌を読んで意を強くしたり等懐しい思い出が教室便りにはまつわりついている。ところが自分が書く番になると、どのように書いたら良いの

か一寸戸迷うが、以下微生物学教室の現況を記してみたい。戦災で丸焼けとなり、昔の体研建物内の衛生学教室の隅つこにしばらく身を寄せていた教室は、昭和二十一年夏医学部が城内二ノ丸の現在地に決まると逸早く移転した。終戦の混乱で荒れはてた兵營の被服倉庫に九州開拓事務所と相住いして物質欠乏と設備不足とをかこち乍らも、すでに十有二年の歳月が夢の様に流れた。その間、教授始め歴代教室員の努力で徐々に研究室らしい様相と雰囲気盛りに上げて来た。六つの研究室と無菌室、天秤室、遠心沈澱室、培養基室、孵卵室等細菌学の研究に必要な設備、機械が一応整つて来た。現在の教室のスタッフは六反田教授の下に北原、沖、木場、野中の助手四人、原田、南の研究員二人が常時勤務し、研究生六十余名が研究室に通つてゐる。一昨年九月徳田助教が突然急逝され、次で昨年九月多賀講師が再春荘に栄転されてから一年、教授は頤健を誇りつゝ研究指導と学生の講義を一手に持たれ、文字通り吐哺握髮多忙の連日である。渡米、留学中特に小兒麻痺病毒の研究に参加し、帰朝後、本邦小兒麻痺の撲滅を意図する教授は、内には組織培養に依る各種ウイルスの研究や、細菌毒素の研究に邁進、

外では昨年度の日本細菌学会々長、同じく本期の九州支部長等をつとめられ、今や全く油のり切つた所である。一面、教授の帰朝後一新した若い助手達は、新しい時代を背負つて起つ気魄と勇氣で、卒直な討論もし、切磋琢磨、遠慮のない批判をし乍ら和やかな研究生活を送つてゐる。食後の一時は教授を中心に教授一流の雑学の講義を拜聴し乍ら、和やかに過すが、時には意見をさしはさんで駁論し、食後の腹ごなしをする。又月一回日本細菌学会九州支部熊本地方会を開催し、研究発表や内外文献の抄読等をやつてゐるので、大方の御参加を戴いて更に盛会になる様に希望してゐます。

(三十二年十月三十一日 野中記)

衛生学教室

同窓会の復活を言祝ぎ、会誌複刊を喜び乍ら、私共の教室の近況を簡略にお知らせ申しましょう。

教室の歴史は古いものではありません。昭和十七年の創設で小栗一好教授がその基礎確立に献身され、次で同教授の東大転任の後を受けて、昭和二十七年入鹿山且朗教授を迎えました。そして蕭々と伝統の揺ぎない磐を築

きつゝあります。す現在教室員約三十名、それへのテーマに研鑽して居りますが、功成つて去る人のみ多くて新しい入局者がとみに少いのは残念に思われます。教室の仕事は環境衛生問題に主力を向けて居り、時には汚物變水を実験の資料に致しますが、嫌悪なざらずにお訪ね下さつて、衛生学も医学の継子でない事を御批判願ひたく存じます。

来春四月には第二十八回日本衛生学会総会が入鹿山教授を会長として熊本で開催されますので、目下準備に大奮です。陰に陽に御援助願ひれば幸いです。この文も忙しさにまぎれて粗つなものです。御勘弁下さい。以上

公衆衛生学教室

先日級会があつた折に夫々近況について自己紹介をする事になつたが、私の番になつたので「所属は公衆衛生学教室です」と言うのと、どこかで「うんこの研究か」という野次が出た。かういふこの研究「勿論結構であろうけれども、現在医学部を卒業するものの中でも、公衆衛生学イコールスかういふこの研究」位の概念しか持つていないのが大部分なのでないかと思う。ましてや一般社会の人々は公衆衛生学教室が一体何をする所か全く見当

もつかないと言うのが実状の様だ。喜田村教授がさる席上で「上医は未だ病まざるを医し下医は已に病みたるを医す」と古い中国の句を引用されたことがあるが、予防医学の重要性は、どれ程強調しても強調し過ぎることはないであろう。日本の医学が、従来下医養成に専念してきたという訳でもなからうが、戦後アメリカ医学の影響は各大学に公衆衛生学教室の新設をもたらしした。

初代の山田秀一教授の後をうけて、昭和二十九年三月京大公衆衛生学教室より喜田村正次教授が就任され、現在助手四名と研究生十五名が師事している。教室の主な研究課題は産業医学殊に工業中毒に関する事等であるが、現在迄の主な業績の中にはパラチオン中毒に関する研究があり、又最近水俣病と四つに取組みその解明に教室の主力を注いでいる。昨年来、教室内は B_{12} , Cl_2 , SO_2 , NO_2 , H_2 等のガスが充満して余り快適な労働条件？とは云へないが、それにもめげず教室員は熱心にドラフトの前で灰化を続け或は蒸溜や滴定操作を繰返し又検圧計を動かしている。かゝる厳しい実験生活の中にも自ら余暇あり昼食事は卓球に熱中する。医学部「Z」の富田助手のお蔭で教室員皆強い。挑戦する教室

があればいつでも応ずるが敢て無暴の拳に出る所のないのは聊かも淋しい。

最後に吾教室の特色は、新しい医学の場にふさわしく真に民主的であり、家族的な楽しい雰囲気は他に類をみないと思う。之は勿論オヤジさんの徳の致す所であり、我々教室員が人間的な生活の中で研究に没頭出来るのは全く幸福だといわねばならない。そして、かゝる条件の中から真に人類に福祉をもたらす尊い研究業績が生れ出ることを信じて疑わないものである。

寄生蟲病学教室

戦後新たに熊本大学医学部同窓会の名称の下に、長らく絶えていた熊大医学部同窓会が再結成され、同窓会々報の発行も着々と行われています。戦前の諸先輩には寄生蟲病学教室の名称は何か耳新しいものがある事と思います。昭和二十四年新設され、岡村教授の下に教室先輩の努力の結晶を集めて、ようやく建設期を終り、現在寄生蟲病の各分野に研究を続けています。即ち寄生蟲病の発症病理、体質との関係を主題目として、寄生蟲症のアレルギー・性病理解変化、寄生蟲の組織化学的研究更に寄生蟲の電子顕微鏡学的研究、又放射

性同位元素の寄生蟲分野への応用等の目的に向つて頑張りが続いています。

現在岡村教授以下、講師一、助手三、大学院学生一、選修生三、研究生三十人の大世帯が岡村教授を中心として上記の研究を致しています。

尚教室の名称ですが、寄生蟲病学教室が正しい呼称で寄生蟲学教室、寄生蟲教室等と云う宛名でよく郵便等参りますが当教室は蟲体そのものゝ研究よりも、虫によつて起る種々の障碍について研究するのを主目的としています。故に是非「病」の字をお忘れなく、

以上簡単ではありますが、教室便りに代えさせていただきます。(講師 松下記)

法医学教室

法医学と聞かされた時、同窓の皆様はきつと世良教授のことを想い出されることでしょう。その筈です。世良教授が本学で教鞭を取られてから丁度三十五年、この長い年月の間謂々而て酒脱の名講義(御記憶でしょう。)が幾回となく繰返えされ、今年目出度く六十一歳の還暦を迎えられました。

私共は本年二月、教授の還暦並に開講三十五周年を記念し、遠近より多数の御列席を戴

いて、記念講演会及び祝賀会を催しましたことを先ずお知らせ致します。

扱て教室は終戦後静寂の地熊本城内の一隅に仮住いし、戦禍の苦杯を満喫すること十余年、漸く研究施設や機械類・器具類も一応整備せられ、教室員も教授以下松永昭助教授助手三名、研究員四名、大学院学生一名、研究生四名、少数乍ら充実したメンバーが揃い、研究に娯楽に、和やかな毎日を送っています。

研究の分野では法医学の使命である法医・鑑識、血液型、指紋遺伝等の諸問題は勿論のこと、昭和二十七年農業有機磷剤が世に出たからは、他に先がけて之が研究に着手し、本年夏には昭和三十四年度東京での日本医学会総会に於ける法医学会の宿題報告を担当することになり、内外の各種有機磷製剤や之に関連する乳化剤・溶剤等に就いてその毒性特に酵素化学的究明に旧倍の拍車をかけ、着々その研究成果を挙げつゝあります。

加之、現在の法医学教室建物が白蟻害甚だくし、何時崩れおちるか分からない切迫した状態になっていることから、基礎教室の新建築を促進して、私共幾星霜の憧れが実を結び今夏より昔懐しい本荘の地に基礎研

各教室の新建築が着手せられました。来春には教室移転の第一陣を承つて、迎早く鉄筋コンクリートの新学舎に移ることになっており法医学教室は明るい、力強い清新な希望に満ち溢れております。

昭和三十三年十一月二十六日

(助手 佐々木記)

第一内科学教室

当教室は昨年十二月勝木教授を九大に送つたが、本年五月阪大から河盛教授を迎えて清新の気が漲っている。河盛教授は結核研究で夙に名を知られているが、特に三十三年度の結核病学会総会で「INH大量療法」のシンポジウムを引き受けられ、現在八施設の協力を得てINHの血中濃度、喀痰中濃度、結核菌の耐性、カタラーゼ活性、副作用等の面からINH療法の再検討を為されつゝあり、従来ともすると機械的に行われ勝ちであつたINH療法も本研究完成の暁にはその基礎が確立すると思われる。この為現在教室をあげて本研究の完遂に邁進しているが、研究室の灯が終夜あか／＼と輝き続けている事に氣附いた人もあるであらう。

同教授は又化学療法学界の主鎮でもあり、

諸種細菌に対する化学療法剤の基礎的研究も行われている。

従来細菌感染に於て重視されて来たのは菌の毒力と生体の免疫性の問題であり、生体の更に根本的な、自然抵抗性とも云うべき問題が取り残されていたと思われる。そこで取り上げられたのが内分泌との関係及びプロバジンシステムの問題でその成果に期待がかけられる所以である。

次に昨年夏より問題となつてゐる所謂水俣奇病に關しては、其の後引き続き病因、本態等に関しあらゆる角度から追求しているが未だ決定的の結論に達していない。研究担当者の努力に敬意を払うと共に、その解決の一日も早からん事を祈つてゐる。

以上の様に研究面のみに張りきるばかりでなく、健全な精神は健全な肉体からと云うわけで出来るだけ陽光に親しもうと心掛けてゐる。

教授赴任以来未だ半年を過ぎたばかりであるが混全一体となり、第一内科の発展に力を盡している姿は誠に微笑しい限りである。

(三十二年十一月三十日 岡嶋透記)

第二内科学教室

河北教授は昨年三月末に熊本を發つて外遊の途につかれ、アメリカで約一年三ヶ月（主にボストンに御滞在）、歐洲で約三ヶ月（ドイツのフライブルグ大学に約一ヶ月、スイス、フランス、オーストリア、デンマーク、イタリー、エジプト）を歴訪されて、本年九月二十七日羽田空港着、同十月三日無事帰熊されました。此の間昨年八月にはボストンで開かれた第六回國際血液学会、今年八月にはコペンハーゲンで開かれた第六回歐洲血液学会に出席されました。又帰途、カルカタ、ラングーン、バンコック、ホンコンの血液学者を訪れ、來春名古屋で開催予定の第一回アジア血液学会の打合せをも行つてこられました。一年半振りに拜見する河北教授は、所謂インドヤケとかで頭の皮までも日焦けされ、血色素も至極良好、逢う人毎に若返つたと云われる程の御元氣さ、外遊の疲れも見せず頭張つておられます。

目下医局は、來年四月のアジア血液学会の宿題シンポジウム「白血病及び貧血の統計」の仕事に取りかゝっています。

松原助教は相変らずの勉強の合間に奥様

をさがしておられる様ですが、余り仕事に忙し過ぎて老先生御自身にはとてもその暇はなさそうです。

山崎、山元、川辺、松田、齊藤の各講師、守屋、野津原、佐分利、宮本の各助手、三十名の研究員、三十八名の研究生、八名の大学院学生、以上が第二内科の現状です。

尚川辺博通前医局長は本年七月、陸上自衛隊熊本地区病院副院長として転出、現在非常勤講師

橋本薫明君は本年八月、大分県立病院内科部長に転出されました。（松田）

小兒科学教室

わが教室も、明治三〇年私立熊本医学校に小兒科が開設されて以来、満六〇年に當る。

その間大島、大谷、後藤、齊藤、中村と次々に部長を送り迎え、大原清之助教授時代に大学の教室らしい設備の下に、「疫痢」なる研究テーマで華々しい学会活動を行つた。戦災後大原教授の停年退官の後、弘好文教授が北大転出迄教室を主催され、昭和二六年大原門下の長野祐憲教授を鹿兒島大学よりお迎えして、今日教室に籍者約四〇名を擁する大世帯となり、研究に診療に多忙な毎日を送つてい

る。

長野教授は現在附屬病院長として、困難な病院復興、経営に繁忙の日常を送られ、その間教室の研究テーマ「乳幼児下痢症」の研究指導に寧日なし、又昨年来更に水俣奇病綜合研究班の一員として本病解明に努力されている。

筆者は等しく大原門下の一人として、先輩長野教授の下に極めて快適に研究に従事し、本春は日本小兒科学總會において「疫痢様症状の病理と治療」と題して特別講演の光榮に恵まれた。

教室は講師として原田義孝（昭一六卒）、谷一幸雄（昭二四卒）の両君を擁して、教職員一同和氣あいあいの内に楽しく勉強している。

又教室同門を以て組織する熊大小兒科同門会は、長野教授開講の五月に毎年總會を開き「熊本同門会誌」の発刊は三十一号を算え、研究発表と同門融和のきつなとして、同門各位の歓迎をうけ、且又同会誌は医学部内各教授を始め全国大学小兒科教授に寄贈し、教室の偉容を誇つている。

一方地方学会活動としては九州小兒科学会及び熊本地方会を開催し、又昨年小兒保健に

関係する保健所医師、保健婦、栄養士、養護教諭、保母、助産婦、看護婦及び小児科医を以て熊本小児保健研究会を結成し、研究発表及び公開講演会を行つて、小児保育の地域活動を行つてゐる。

以上のように長野教授の主催の下に、教育研究、診療並びに学外活動に、教室の一年間の歩みは真に多彩を極めてゐる。

今後ますます教室の発展が期待される所以であり、同窓生各位の御支援をお願いする次第である。

(貴田丈夫)

第二外科学教室

第二外科では勝屋教授指導の下に六十名になんなんとする医局員が毎日を送つてゐます。それに県内は勿論九州各地及び広島県にいたる各病院への医局外勤務をしている医員がいますので医局員の総数は七十余名という膨大なものになります。之等の医局員は吉永助教、小林医局長を除いて六つのグループに配属されます。一つのグループは講師或は助手を長として九名ないし十名を以つて形成され、一つの診療単位となり、各員に、より多くの経験を体得せしめる様な組織にしてあります。各グループは三ヶ月毎に病棟、外来、

分院、麻酔の順に勤務を交替し、其の間の診療責任を持たされます。

新外来棟の完成にともない、教授、助教、研究室は昔のまま中の三病棟に残したが、医局及び研究室の移転を行い、旧二外科外来に第一医局、講師助手室、図書室を、旧薬局（地下）に医局長室、第二医局、及び第二外科の全研究室を持つ様になりました。此の研究室では、現在、胃潰瘍、胃癌、乳癌、イレウスの研究、手術に対する人体の各種変動、麻酔による人体の諸変化、術後栄養、及び吸収、輸血、輸液に関する事等、外科に関する多種多様な実験研究が活発に行われてゐます。又隔週毎に外国文献の抄読会が行われ、新しい知識の吸収、考察が行われてゐます。

リクリエーションの方面も活潑で、毎年一回の医局リクリエーションには教授御夫妻、助教、医局長を始め各医局員、補助員、看護婦諸兄姉が大挙一泊の旅に出て日頃の心掛を開放する事になつてゐますし、春秋二回の各グループ対抗野球（或はソフトボール）には教授よりいただいた優勝盃、準優勝盃をめぐつて愉快な好ゲームが展開されます。

尚勝屋先生には、今後の御活躍に備えて、唯今人間ドック入りをなされてゐますが、近

うちに、その御健康なお姿に接する日も近いものと思われまふ。

以上簡単に第二外科の近況を御知らせしました。

(碩本記)

整形外科学教室

快適な肥後の秋も慈々ふかまり、旬日で極月がやつてこようとしております。全く早いもので、教室も間もなく四才。もはや新設などとは、申せなくなりました。思えば昭和二十九年六月、病棟の一室で診療を始めたのですが、何しろ、することなすこと不自由で、メンバーも教授以下七名、という有様でした。しかしながら、教室誕生以来、諸先輩各位の一方ならぬ御支援と、教室員、看護婦の毎日の努力によつて今日まで支障なく、すくすくと成長を続けて参ることが出来ました。殊に各教室より戴いた愛情のこもった御協力には、深く感謝致しておるものでございます。

現在のメンバーを紹介致しますと、玉井教授、北川助教、橋本講師、樽原、寒野、中島、高浜、栗本各助手。三浦、鮫島、後藤（澄）、後藤（昭）、大宮、西、大島、各研究員、木村、広田、樽美、鶴上、中尾、竹下、片岡

清水各大学院学生、永田、片岡、水岡、大山安部、白石、八田、各研究生以上教授以下二十九名という一応の大世帯。

開設当坐は、研究も、試験管一本から揃えてかゝらねばならず、教授も大分氣をもまれた様子でしたが、最近では整備も進み、着々と成果を挙げつゝあります。即ち、開設三年にして、早くも『手の外科』の共同研究を玉井教授が分担され、恵楓園の御協力のもとに、来春の総会に異色ある研究成果を発表されることになつております。また、北川助教授は数少い骨腫瘍を着実に一例々々集められ、組織化学の面から病態を追究中であり、やがては骨腫瘍の診断に、大いに貢献されることゝ期待されております。骨腫瘍を始めとし、組織化学の研究は当科の主流と申すべく、多岐にわたる研究は、やがて花を咲かせ実を結ぶことゝ思われます。しかし忘れてならぬのは病理学教室よりの多大の御助力で、唯々感謝の程もありません。歴史が浅いため、研究の実際の成果が挙がるのは、これからというところで、フアイトマンの教授を陣頭に、有能な学徒らの研究振りは、前途まことに洋々たるものがあります。

診療面では、新外来への移転を終り、あと

ギブス室が出来上れば一応整備完了というところで、レントゲン技師がおらぬこと、診療に真裸にすることの多い当科としては、冬にスチームの通らぬのが玉にキズ。看護婦は、人員の少いに拘らず、その勤務振りは実に素晴らしく、涙ぐましいものがあります。また医者とコンビは上々で、診療上の不合理を是正するために、年に一〜二回、教授以下医員、看護婦、技術員など全員で、医局合同会議を開いております。このことは、全員が、気持ちよく勤務出来る場を創り上げることに非常に役立つていると思います。

さて遊びの方は、と申しますと、春秋恒例の医局旅行、更に忘年会は、こよなく楽しくこのときばかりは無条件で、教授以下ひとしく只の人間。自然をたのしみ、また美酒を傾け、食い、歌い、ダンスに麻雀に一日を明かしますが、教授の越後美男若者振りは内外に定評のあるところ、これに男と云わず女と云わず猛者揃いで、全く医局の楽しさは、このときをもつて極と申せましょう。またスポーツは、開設当初は、他科との連合チームで医局対抗野球に出ていたのが、今では単独チームで堂々と優勝戦に臨むといった発展振り、これもナンデモ屋（なんでも上手という意）

の教授陣頭指揮のしからしむるところでありますし。

以上感じたまゝに書きつらねましたが、開設以来の苦勞を、ひとりひとりが体験し、全員が教室の歴史を築き上げることによろこびを感じながら、今日まで歩んで来たということに、私達の教室の特殊性があると思います。若さに溢れたメンバーは、男も女も、各自のなすべきことに忠実に、そして楽しく毎日を送つております。どうぞ先輩の皆様、育ちつゝある末ッ子を、今後共、何分宜敷くお願い致します。

（三十二年十一月二十五日・橋本記）

耳鼻咽喉科学教室

耳鼻咽喉科学教室は昭和二十年の戦災で外来診療所及び病棟を残して研究室の全部を焼失してしまつた。同年八月終戦と共に鋭意教室の戦災復旧に努力され今日に及んでいる。昭和二十二年六月鰐淵先生は病院長に就任、翌二十三年九月医科大学長に就任され、昭和二十四年五月熊本綜合大学発足に伴つて昭和二十五年一月には推されて熊本大学長に選出された。その間先生は病院、大学の復興に御多忙を極められたにも拘らず、又教室の復旧

整備も着々と行われた。

昭和三十一年二月鰐淵先生が学長に専任される事となり、昭和二年以来満二十九年間当教室の教授として親しく私達門下生の御指導を賜わった先生とお別れしなければならぬ事は洵に名残り惜しい限りであつたが、後任として教室の先輩であり且つ本学御出身の野坂先生を教授としてお迎え出来たことは私達教室員としてまことに幸福な事であつた。野坂教授御着任以来教室の整備、研究は益々拍車をかけられ、昭和三十一年九月外来診察が新外来診察所で行われる事となつて、旧外来診察所は戦災後外来診察所や病棟の一部に同居していた研究室を統合し始めて独立した研究室として使用される様になつた。

戦後講師として教室の発展に努力された高田先生は東京で開業され、丸山先生は佐世保共済病院に奉職されている。又病院長或は学長として御多忙であつた鰐淵前教授を援けて内助の功全くよく教室を守つてこられた熊谷助教は昭和三十一年辞職され、現在自宅で御開業なされている。

終戦後一時は数名に過ぎなかつた教室員もその後次第に数を増加し、現在では野坂教授の下に助教、講師各一名、助手五名、研究

員三名、研究生八名、専修生二名、大学院学生三名を数えるに至り教室は益々隆盛の一途に向つてゐる。私達教室員も及ばずながら野坂教授の御指導の下に教室発展の爲めに微力を盡す考である。

(田上俊忠)

産婦人科学教室

長谷川前教授の後任として熊本に着任した時は、いまだ戦災の跡生々しい十年前の六月で、大学附属病院は勿論熊本市内は尙一面の焼土で、米どころ肥後も食糧難にあえぎ、十名足らずの医局の人達と共に、病院焼跡を耕し、甘藷やなす等を作り、食糧の足にしていた當時を思うと、全く感慨無量です。

十年一昔というが、その間に熊本医大も熊本大学医学部となり、大学院も設置され、遅々としてゐるが、復興し、医局員も、次第に増加し、現在は大学院学生も含めて常勤四十名、研究員を合すると、七十数名の大世帯となり、新外来診療棟の落成に伴い、旧外来を研究室に整備して、研究に診療に努力を續けています。

では外来、病棟の診療の概略、並びに教室の研究の一端を御紹介しましょう。先ず外来患者診療は去る九月十六日より新

築落成の新外来に移転し、新患は月・火・金・を教授診察日とし火・土曜を助教・木曜日を講師が診ています。再来患者は助教講師が直接指導し、産科と婦人科に分け、更に子宮癌、不妊症、内分泌、泌尿器系の各係りをもつけ、子宮癌の早期発見、不妊症等内分泌障害の治療に力を盡して、外来診療の進歩向上を期してスタートした所です。又、入院の方は手術係・ラヂウム・コバルト係・レントゲン係・麻酔係・分娩係等に分け、二カ月毎に交替して医局員が皆すべてに習熟しているようにしています。特に婦人科医は放射線療法には深い知識と熟練を要すると考え、昭和二十六年来、教室に深部線照射装置二台並びに体腔管を備えつけ、交替で治療を行わせて来ましたが、更に先般東京以来の友人上野一男氏に〇〇深部治療照射一式を寄贈して頂き、近く旧外来地下に於て治療を開始する運びとなりましたので果下は勿論、広く西日本各地の方々にも多大の寄与をなしうる事となりました。

他方麻酔も日進月歩の進歩をとげておりますが、循環麻酔器の購入以来、腰麻で屢々手術に困難を来したり、高年或は高血圧等の為あたらず手術を避けていた数年前に比べると、現在では全く、隔世の感があり一般への普及を切におすゝめします。

他方教室の方も戦災の復興に伴い、研究設備も次第に充実し、妊娠中毒症の実態の研究から、最近は更に治療面にまで及び、その他子宮癌、悪性絨毛上皮腫、不妊症、更年期障害等の内分泌異常、組織培養等各方面に研究の手を進めております。又毎週月曜の午後は抄読会、研究会臨床問題についてのコンファレンス等を行い、コンファレンスでは他の教室よりの応援を求めて討論しています。

又一昨年秋より冬にかけて短期間ではありましたが、欧米各国を一巡して、主要大学の産婦人科教室を歴訪し、研究に診療に長足の進歩をとげている様を眼のあたりに見て参りました。諸設備や研究費等は我国とは比較にはなりません、今後文化国家として生きるわが国としましては、創意をこらしてなんとかこれら諸国に負けない様に努力致さねばと考えております。

同窓各位の折角の御援助、御協力を御願ひ致す次第です。
(教授 加来道隆)

皮膚科泌尿器科学教室

夏も冬も午前九時から開始される病室の診療によつて教室の一日が始まる。現在ベットの割当は卅一、いつも満床で非常に不便して

いるが近く十程度増床される由、病棟は終戦直後同窓各位の御寄附になつた中の一つであるが、すでに古びて歩く度に床板が上下に動揺し、豪雨ともなると屋外同様な雨漏りに辟易する。外来診療は九月から新外来に移転したが未だ施設、備品が揃わず、機能を充分に發揮するに至つていない。然し旧外来の狭隘さに比べると将来はどうやら大学らしい診療が出来ようである。中央手術室、中央検査室は机上案のまゝおあづけとなつたので手術室は旧態依然として整形外科との共同で、夏でもスチームが通い、室温三十八度と体温を越える日もあり、冬ともなれば屢々吹雪が舞込む等、文部省の御役人からも日本一の手術室と折紙付きの処で、それでも止むなく教員一同不撓不屈の鍛錬にいそしんでいる。

新外来移転によつて旧外来三階の一部が皮膚科教室に割当てられ、教授室、助教室、研究室(三)、図書室、医局がおさまつた、まだ電気、ガス、水道等が不備のまゝ夜十時を過ぎ、時には十二時過ぎまでも研究室に頭張つている。

旧帝大、新潟、金沢の国立大学、東京、近畿の公私立大学はいづれも皮膚科と泌尿器科とが夫々独立講座となつて居り、九州では九

大は古くから、近くは久留米大が独立講座になる等、このまゝでは長足の進歩をなしつゝある同学会からとり残される恐れが極めて大きいので我教室も九月より皮膚科学は中村助教が荒尾講師と共に分担し、泌尿器科学は橋原教授が池上講師と共に担当することにして教室内では実質的に二講座制としてその指導のもと助手四、研究員二、大学院学生三が研究にハッパをかけられている。本年初夏、児玉、山下、田尻、市村の諸君を国立熊本、人吉総合、県立延岡、水俣市立の各病院院長へ送り出したことは、来年三月の総会をひかえて止むを得ないことではあつたが、医局としては甚だ苦しいことになつた。

来年三月には日本泌尿器科学会総会が橋原教授を会長として熊本で開催されるが、宿題に橋原大教授、原田横大教授司会のパネル、婦人科的泌尿器科学には本学婦人科の加来教授も特別発言者として参加され、特別講演には橋原教授の外九州の他の四大学から夫々教授又は助教が加わられる等、従来の総会と大部趣きを変えた学会を行うことにして、準備に教室をあげて精一杯の努力をしている。泌尿器科専門家の方々は勿論、外科、婦人科の方々多数の御参会を御願ひする次第である。

体質医学 研究所形態学研究部

竹屋男綱教授が定年御退官された後を沢田芳男教授が引き継がれて満二年経過した。こゝに教室の最近の主なる研究についてお知らせ致し、今後とも一層の御厚情、御鞭撻を賜わらん事をお願いする次第です。

体質医学研究所の共同研究である生体機能減退の機構・防止及び回復に関する研究に大きい努力を払っている外に、つぎのような事柄にも可成り力を入れている。

「米俵に練馬大根をくつゝけた」と表現された昔にくらべ、ちかごろの日本の娘たちの体位向上は驚くべきものがある。この現在の体位を記録保存しておくのも意義ある事のように考え、各年令・性別の体格・体力を検査している。なお国民全体の体力を少しでもよくすれば、国の人的能率は高まるであろうと考え、より一層日本人の体力向上を計るための研究を実施中で、現在のところ、われわれの体力に影響を及ぼすいろいろの後天的作用因子のうち、主として体育運動の影響についての調査研究を行っている。

以上の事に関連して体力の測定と評価を種々検討し、これらに改良を加えつゝある。

一方日常極めてありふれた現象でありながら、未だ本態の判明していない疲労の諸問題をとりあげ、なかでも疲労と微量活性物質すなわち酵素、ホルモン、ビタミン、無機塩類などの消長との関係を攻究し、疲労の本態究明にも努力している。

(構成員 主任教授 沢田芳男 助教授 緒方勇士郎 助手 四名 研究生 十五名)
(主なる研究設備・ポラログラフ、光電分光光度計、光電管比色計、冷却式超遠心器、十六ミリ撮影及び映写機、電動計算器) (坂田記)

体質医学 研究所生理学衛生学研究部

戦災の傷手も生々しい昭和二十二年の春に熊本大学体質医学研究所に体質衛生学部が開設され緒方教授が初代教授として御赴任になりました。そして早や十年半を迎えたのでありますがその間昭和二十二年の十一月十八日に本庄町より現在の城内二ノ丸に居を移し、以後その日を教室の祝日と定め本年は十週年を迎えたのであります。尙昭和二十九年には熊本大学体質医学研究所生理学衛生学研究部と名称が変更されました。

開設當時は一名の教室員もなく実験の設備器械はおろか机、椅子一つない文字通り無の中からの出発であつたのでありますが、緒方教授の研究に対する旺盛な意欲は最初の一本の体温計を手に入れられると共に始まり、早くも同年には「体温の年間変動」という本格的な実験に着手されたと先輩から伝え聞かされております。以降加速度的な発展を遂げて今日では体温調節の研究に関する設備とその活用状態においては我国でも独特の地歩を築きあげて来たと申しても過言ではなからうかと存じております。その間当部の活動状況がうかがえるものとして緒方教授の特別講演は十一回にも及び、最近では今秋に日本体質医学会総会において、更に来春には日本衛生学会総会の特別講演が予定されております。

無一物から出発し昭和二十二年秋の移転時には机、椅子類までを合せて二台の中型トラックで事足りたという諸設備も現在では、人体天秤、人工気候室、各種発汗測定装置、測温装置。キップゾンネン製の電気ガス分析器、ランゲ製焰光光度計、ウォーター製イヤオキメーター、ガス代謝測定装置、電気生理学に関する諸設備等々所狭しと置き並べられ感慨深いものがあります。これら諸設備の充実と

相俟つて教室の業績も着々と積重ねられ、現在の研究方向を大別致しますと、(1)環境順応の生理的要因に関する体質医学的研究、(2)寒暑耐性に関する個人差とその原因に関する研究、(3)諸環境条件下における作業能率向上に関する体質医学的研究、(4)癩患者の病態生理並びに癩素因に関する研究、(5)体温調節機能を中心とした諸疾患の病態生理学的研究、(6)シヤニン系感光色素の作用機序に関する体質生理学的研究となるようでございます。

現在員は緒方教授、佐々木助教以下助手四名、研究科学生二名。選修生二名、研究生十七名の構成であり、この他国立療養所菊池恵楓園、自衛隊及び熊大教育学部の保健体育科とも協力の下に、緒方教授を中心に一団となつて和氣霧々裡に研究を続けております。

(田代信之記)

体質医学 研究所病理学研究室

わが研究部は、昭和十四年体質医学研究所設立と共に開設され、初代森茂樹教授、第二代波多野輔久教授に次で、第三代河瀬收教授が昭和二十六年十月から現在まで教室を主宰しておられる。

わが研究部の研究は、体質病理学の領域に

於て多方面にわたつてゐるが、結合織の研究が大きい比重を示しており、生化学的・組織化学的・電子顕微鏡的に、またアイソトープの利用により、着々と未開拓の分野に進みつゝある。また、内分泌学領域を中心とするやグルクロニダーゼ等の水解酵素の酵素組織化学的研究は、ステロイド・ホルモン代謝の種々相を明らかにし、乳癌・子宮癌・前立腺癌等をめぐる問題に手がかりを与えようとしてゐる。特にこの方面に於て、教室内で維持・繁殖中の各種純系動物が大きい役割を果して来た。さらに、阿蘇火山病・感光性色素・癩等についても、教室の伝統に沿つた研究が進められてゐる。

これらの研究を進めるため、実験設備も近年着々と整備されているが、電子顕微鏡・真空蒸着装置・超ミクローム等の充実が特に目ざましい。

一方、本研究所臨床学研究部および市内各病院ないし開業医の依頼による病理解剖ならびに試験切除標本検査は、年々その数を増している。

現在、教授 河瀬收先生、助教授 林正人先生以下、助手 四名、研究員 一名、研究生十四名が研究に従事しており、互いの絶えざ

る協力によりなごやかな教室の氣風がかもし出されている。

体質医学 研究所臨床学研究部

当研究部は発足以来十七年を経、現教授開講第九周年を迎え、又外来診察、病棟開設以来六周年を経て、その内容も充実して來ました教授、助教授の許に助手4名研究員、研究科学生、大学院学生、研究生等四十七名の世帯となり、当部の研究も今や軌道に乗つた所です。

内科、殊に循環器、内分泌にその主体を置き、遺伝体質学の考求も又当部の主題です。高血圧、動脈硬化に関する研究は部を挙げての課題であり、心電図、網膜中心動脈圧、眼底撮影、眼底所見の検索、腎クリアランスを始め腎機能の追求、脂質、脂蛋白、粘蛋白、蛋白結合沃度の代謝を通じ、又指頭容積脈波計、血管透過性試験、毛細血管抵抗測定器等による高血圧、動脈硬化症えの実験的又臨床的な探索は診断、治療に応用されてゐます。内分泌学的には糖尿病、甲状腺疾患など、殊に糖尿病の遺伝体質学並びに素因の早期発見はその主体であります。治療にも大いに貢献しています。滲出性体質、アレルギー

1 体質も又喘息、蕁麻疹などがその主題となつています。

最後に話題を全国になげた禿頭病に関する治療も体研形態と協力して、続行され、一時は全国よりの問合せが殺到したという笑えぬ悲劇もありました。今や幼少期を脱し、今後教室の実績向上を期して、全国唯一の体研を臨床部門に於ても又充実させるべく教室員一同張切つています。

基礎醫學教室起工式

昭和二十年七月の戦災により焼失した本荘町の元熊本医科大学の敷地に再建されることになつた医学部基礎医学教室の起工式は全所において去る八月二十四日午後一時から鰐淵学長、尾崎医学部長はじめ各部局長、関係教室教授及び職員その他来賓多数臨席の下に盛大に挙行され鰐淵学長が鉄入れを行った。

なお、本年度の工事は体質医学研究所を含めた第一期工事約四、一〇〇坪のうち、鉄筋四階建八八〇坪で明年三月完工の予定である。

熊本大学学生歌

(昭和二十八年)

「銀の光」

作詞 医学部 村上 光
作曲 医学部 宮崎 幸雄

一、銀の光あふれ 濃緑にむせぶ学舎

若き希望若き希望 あゝ自由の風

ミネルバの 森に和む

二、桑海の時の流れに たゆまざる学びを誇る

若き希望若き希望 見よ千古を秘めし

蘇嶽の 気高き姿

三、求めし深き啓示に 真白なる珠を汲みて

若き希望若き希望 たどる久遠の道

真理の燈は 耀ふ

熊本大学学生歌

(昭和二十八年)

「みどり展く」

作歌 法文学部 薬王寺 啓臣
作曲 理学部 長友 洋

みどり展く 九州路

あらた世の 希望みちて

常若の陽 かぐやきもゆる
熊大 あゝ われらが学苑

天路鎮む 蘇岳

絶ゆ日なく 劫火噴きて

誇りあふる 歓喜をうたう

熊大 あゝ われらが学苑

鐘はひびく 永久に

みんなみの 究理の園

嵐の夜も ともしび消えず

熊大 あゝ われらが学苑

旧熊本醫科大学

(大正十二年)

予科校歌

作詩 北原白秋
作曲 山田耕作

山は大阿蘇 煙は絶えず

河は白川 流れはつきず

匠も又道なり 畏しとこしへ

ラッシヨ ラッシヨ 予科

ラッシヨ ラッシヨ 熊本

ラッシヨ ラッシヨ

ラッシヨ ラッシヨ われら

朝は夕は みを空を仰ぎ

愛し命を 地に肩てまもる

げにげに 匠は道

光れよとこしへ

ラッシヨ ラッシヨ

ラッシヨ ラッシヨ

メスをとりては 慎み深く

床に臨みて うれうるあつし

匠はこれ 齊生

うるをせ とこしへ

ラッシヨ ラッシヨ

ラッシヨ ラッシヨ

あとがき

同窓会々報第二号の編集を了えるに際し、御多忙の中を御寄稿戴いた谷口先生始め多数の方々には厚く御礼を申し上げます。

会報第一号は同窓全部の方々に洩れなく無料で配りました。その際、御案内申上げましたように、この第二号からは昨年再発足の同窓会に、再加入済みの方々に限つてお送り致します。少々余分に刷してありますので、未入会の方には、至急入会金、金五百円(三十一以前卒の卒業生は三百円)住友信託熊本支店宛、その旨御記入御振込み御入会方お薦め下さいますようお願い致します。

同窓名簿も、三十二年度版が先般新装発行されました。この方は別途会計で、残部も僅少であります、御希望の方は代価三百円を添えて直接医学部宛御申込み下さい。

この会報記事に載っておりますように、附属病院には鉄筋二階建の立派な外来診療所が出来上り、基礎教室はその向い側、元の敷地に第一期工事が八月起工され、今、中棟の半

分の鉄筋四階建の工事が進捗しております。来る四月には解剖・病理・法医・衛生の七教室が移ることになります。

基礎教室三棟が完成する頃には、待望の同窓会館を建設致し度いものと念願しております。そのために、先ず同窓会館建設期成準備委員会が近く設けられることになりました。

スプトニックとミサイルとの驚異の裡に、昭和三十二年も終ります。同窓皆様方に、よき新年の御多幸あらんことをお祈り致します。

編集委員

世良、小田、岡村
沢田、貴田、松原

この会報について、今後どのように編集し、運営するのがよいか、皆様方の御指導御批判を給わりたいと冀っております。

昭和三十三年十二月二十日印刷
昭和三十三年十二月二十五日発行

(非売品)

編集人 岡村一郎
発行所 熊本大学医学部同窓会
熊本市大江町九品寺一三八
印刷所 佐伯印刷所

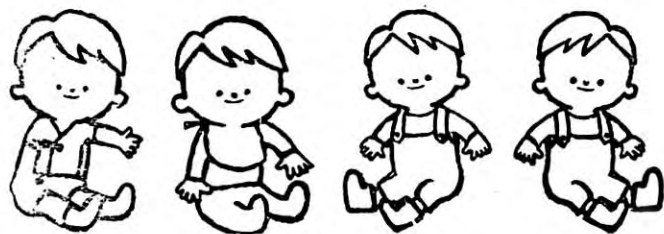
育兒にはこれが必要!



ニッポンソーダ 明治コナミルク



明治乳業



なぜ おすすめするか……

ロケット・ミルク・プラント
 高速度粉乳製造装置は原乳から缶詰
 まで三十分十五秒の短時間で衛生的に
 粉乳を生み出します このスピード
 のためドライミルクは栄養価が高く
 消化もよく風味もすばらしいのです

・母乳と同じ抵抗力……腸内にビヒズ菌とい
 う有益菌を生み出して下痢・腸炎を防ぎます
 ・母乳児のようなよい発育……九つのビタミン
 三つのミネラル・蛋白・脂肪など発育に必要な
 栄養をもれなく含んでいます

・母乳と変らぬ消化と吸収……どんな赤ちゃん
 でも貴重な栄養がたやすく消化吸収出来ます



森永 β ドライミルク

半ポンド 160円・1ポンド 300円・3ポンド 800円

森永乳業株式会社

祝 熊本大学医学部
同窓会報御發展

熊本大学医学部附属病院内

財團法人 惠和会

惠和会従業員は誠實、親切を營業上の信条とし、財団設立の目的に添うよう努力致しております。

売店、食堂、薬品部にては皆様の御会合、学会等御催しのある場合、御食事折詰、喫茶、御茶菓子、果物、御土産品等御用命があれば、多少に拘らず御用達申上ぐる用意を致しております。

何卒皆様の惠和会として、特別の御引立てを御願ひ申し上げます。

惠和會従業員一同

40才からは毎月1万円

あなたの将来はあなたの貯蓄で

毎月1口10,000円ずつ貸付信託をお申込になつて、配当
複利利殖されますと15年後には約332万円になります。

(現行配当率貸付信託5年もの7分8厘金銭信託年7分5厘にて計算)



住友の

貸付信託



1口 10,000円 元本保証
無税

配当 5年もの 年 7分8厘
予想 2年もの 年 7分

(半年毎実績配当)

☆御請求次第説明パンフレットを御送りします

住友信託銀行 熊本支店

熊本市河原町電停前 TEL 代表③1195



化血研の **ワクチン血清類**

インフルエンザウイルスワクチン其他各種人体用ワクチン
ジフテリア抗毒素其他抗毒素並診断用血清

化血研の **血液銀行**

九州全地区の販売組織

化血研の **臨床病理検査**

市内随時可検物受領者派遣

財団法人 **化学及血清療法研究所**

熊本市古京町一番地

電話 ②1257、4499、4804